－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－

金鋳場遺跡

（第Ⅰ次～第Ⅳ次調査）

1998

伊那市教育委員会
伊那市総務部企画課
伊那市経済部農政課

－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－

金　鋳　場　遺　跡

（第Ⅰ次～第Ⅳ次調査）

1998

伊那市教育委員会
伊那市総務部企画課
伊那市経済部農政課

序

今回、報告書を刊行する金鋳場遺跡は、昭和53年度西部開発事業（西箕輪地区）の一環として、発掘調査が行われました。

この時は、発掘調査地域が限られていたので全面的な調査ができなかったものの、遺構として平安時代の竪穴住居址10軒、出土遺物として土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄器類の出土をみました。そして、第３号住居址から出土した緑釉陶器類一括は現在、伊那市指定文化財考古資料に位置づけられています。

この金鋳場遺跡一帯は後で述べますが、木曽山脈の北部経ヶ岳山麓より広がる扇状地上の扇頂部付近に位置し、発掘当初より、西麓の仲仙寺及び御射山社との関係で、重要視の度合いが大きな地域でした。

今回の調査結果は、当初期待していた程ではなかったものの、各時代にわたる遺物が出土し、長い間にわたって、人間の営みを実証することができました。また、伊那市に於いてはかなり標高の高い所まで人が住んでいた事実がわかり、さらに集落の垂直分布実態も把握でき、この分野での研究に貴重な資料を提供してくれました。

報告書の刊行に当たって、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた伊那市総務部企画課・同経済部農政課職員一同、この調査にご協力いただいた地元地権者、関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

平成10年３月５日

伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

まえがき（金鋳場遺跡の環境）

遺跡の位置

金鋳場遺跡は長野県伊那市大字西箕輪羽広に、また中央アルプス（通称木曽山脈）に連なる蔵鹿山麓や経ヶ岳山麓より流れ出す大清水川、さらに、前述した両山麓より東へ押し出した山麓扇状地の扇頂部に位置している。遺跡地の現況は山林、原野、畑地であり、これらの土層組成は押し出しの土砂の堆積がテフラ層の上に厚く覆っている。

金鋳場遺跡に至るまでの経路は二つの場合が、極、一般的である。まず一つとして、ＪＲ飯田線伊那市駅を下車して、北へ向かって国道153号線を約４、５km程行って、南箕輪村北殿集落の中心地付近を左折し、西へ向かって４km程遡ると大泉新田に到着する。さらに、西向き１km程で吹上に出る。ここで、左に折れて大泉川を渡り、南へ４km程行くと羽広集落に到着する。羽広の南に、羽広荘（昭和51年開設）、みはらしの湯（平成９年10月開設）の温泉保養施設がありこれらの施設周辺が遺跡地である。この路線を利用して金鋳場遺跡を訪れる最短距離はＪＲ飯田線北殿駅で降りて、前述した道順に従っていく方法である。

別口の経路として伊那市街地より西に向かって、大萱、荒井線を約３km程遡ると左手に信州大学農学部の白い学び舎が木立のなかに鮮明に映えている。さらに、１km程西へ行くと、伊那市立西箕輪中学校、伊那市立西箕輪小学校に至る。ここから、県道与地・辰野線を北へ約1.5km行くと羽広集落が散在している。遺跡地は羽広集落の南端部地域に存在し、北側の境界線は大清水川に引けると思われる。

地形・地質

伊那市西箕輪地区は如何なる地形・地質を呈し、如何なる場所に位置しているか、考えてみるに、伊那市においては一般的に標高が最も高く、従って、最も眺望が優れた地域に属しているといっても誰人も認めるところである。

金鋳場遺跡付近にて、パノラマ状に視野を展開してみると次のようになる。東方にひときわ険しく聳え立つ南アルプス（通称赤石山脈）の主峰の一つである仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳（別名甲斐駒ヶ岳）があり、これらの前方に南北に連なる伊那山脈が走っている。南アルプスの懐深き地にて源を発する三峰川が二つの山脈の間をぬうようにして西に流れ、最終的に天竜川に合流している。

西側に目を転じて見れば、南北に細長く連なる山脈の一帯が存在し、その主峰は木曽郡と上伊那郡との境界線を標示する経ヶ岳である。これらの山麓は東南に傾斜して、天竜川の氾濫原に至って東の方側の、高遠、手良、箕輪等のそれと合致する。

西南の方角に高く見えるのが、西駒ヶ岳の前方の将碁頭山である。この山の北側傾斜面と、経ヶ岳の南側傾斜面の合わさる鞍部地点が権兵衛峠であり、民謡「伊那節」に唄いこまれている。

西駒ヶ岳の山麓に展開している集落が、横山、内の萱、大坊、平沢、小沢である。権兵衛峠付近より流出する水を集めて、小河川を成しており、これらが小沢川、小黒川と名称を変え、東流し、天竜川と合流して太平洋に注いでいる。

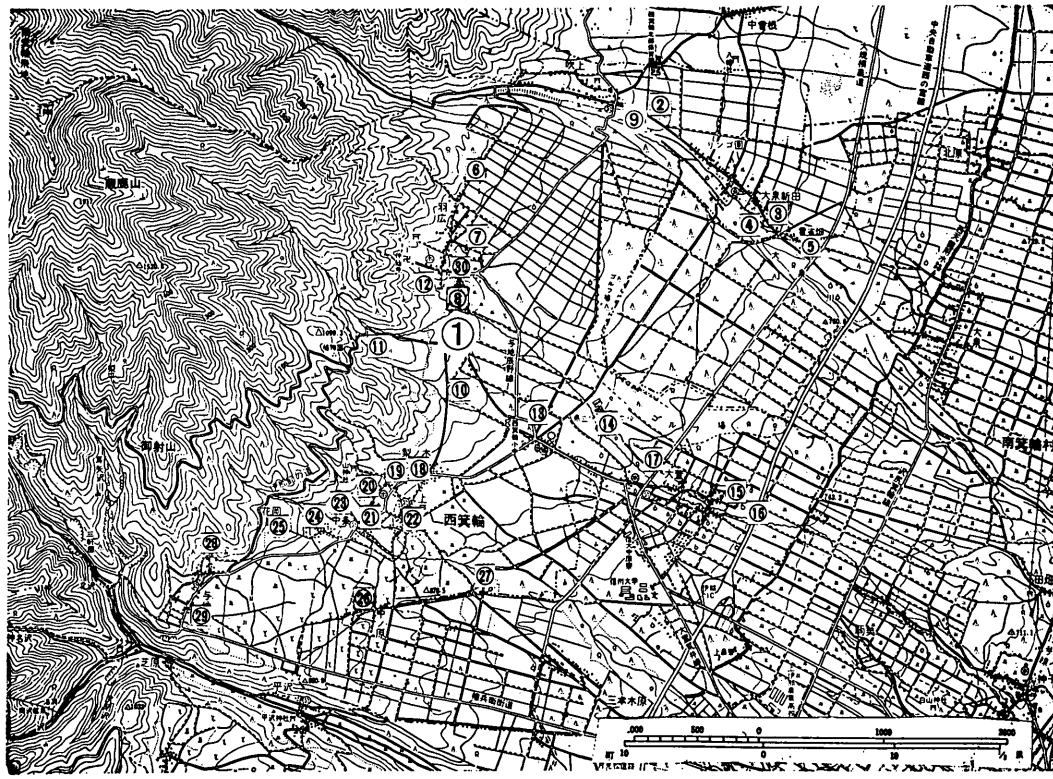
次に、西箕輪地区内に限定した地形並びに地質については、明治35年7月20日発行、長野県上伊那郡西箕輪尋常小学校校長、小林茂理編『わが郷土』を全面的に引用させてもらうことにした。それによると「細かに観察すれば、自ら三個の大区分に分けて居る。(1)を大泉所傾斜地、(2)を蔵鹿傾斜地、(3)を御射山傾斜地と名を付けようと思う。一体、山は遠方より見れば、摺鉢でもふせたかのように、その傾斜がすらりと削り成したるように見ゆれども、近きて之を見れば、実はなかなかさようではない。いくつかの谷が峯に集り、ひだをなして出来て居る。吾が経ヶ岳も、矢張其通りである。我が学校に面したる谷のつまりは、経ヶ岳の内、字蔵鹿の嶺で、この傾斜の広がりたる区域は、羽広、大萱の両部落を載せもちて、東南に走り、南箕輪村と伊那町とにつづき、ついに天竜河域に至り、高遠方面の西方に走れる傾斜に合して居る。これが即ち、蔵鹿傾斜地である。また、蔵鹿の西南に向へる谷、即ち字御射山の傾斜は、上戸、中条、与地の三部を載せつつ西南に走りたるも、南方駒ヶ岳の傾斜の北向かいする勢力に推され、方向を東北に取り、蔵鹿より東南向する傾斜と合し、更に東向して走りたるかのように思はる。之を御射山傾斜地と名付けよ。一も一つ、蔵鹿の嶺の北に於て東北に開きたる大なる谷がある。これを大泉所と言う。この傾斜は、吹上、大泉新田、中曽根の三部を載せて、南、中の両箕輪に入り、天竜河域に至り、箕輪、東箕輪等の西向せる傾斜に出逢ふて居る。これが即ち大泉所傾斜地である。」

歴史的環境

西箕輪地区は経ヶ岳山麓、標高760m位から1,000m付近までにわたって各時代の遺跡が分布しているが、その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また、分布地域が、西箕輪地区遺跡分布図を参照して頂ければ、一目瞭然であるが、大体、四形態に分類が可能である。

2～5、9は大泉川周辺、13～17は大清水川周辺、1、6～8、10～12、18～25、28～30は山麓扇状地上、26～27は無名の多くの沢が入っている場所等であるが、いずれにしろ、水利の利便性に良好な場所に確実に集中している事実は明瞭である。遺跡分布の内訳は旧石器時代4ヵ所、縄文時代早期4ヵ所、縄文時代前期4ヵ所、縄文時代中期25ヵ所、縄文時代後期8ヵ所、縄文時代晩期3ヵ所、弥生時代後期5ヵ所、古墳時代1ヵ所、奈良・平安時代11ヵ所、中世6ヵ所である。

(飯塚政美)



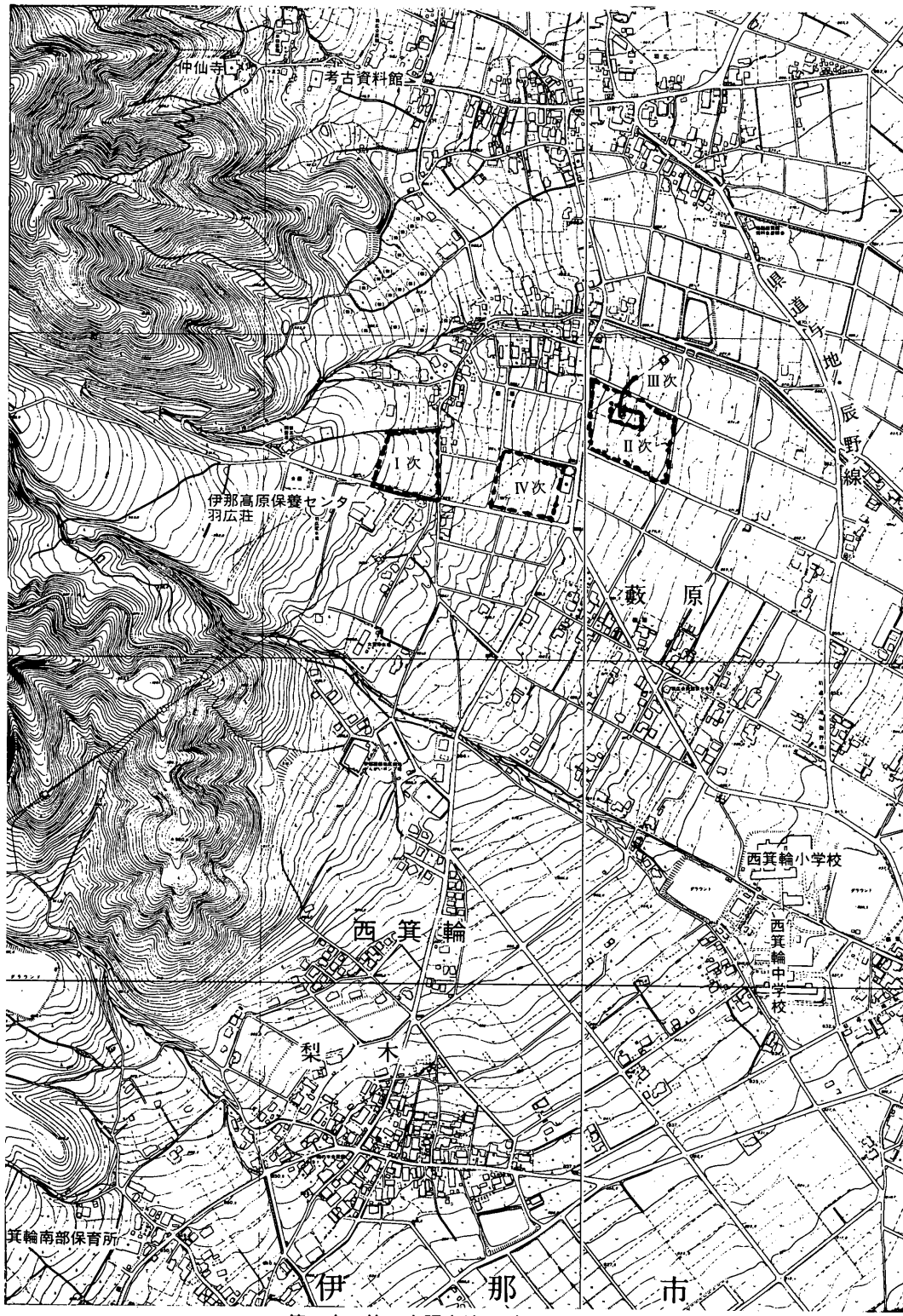
西箕輪地区遺跡分布図

遺跡の名称

① **金鋳場**	② 桜畑	③ 久保田	④ 塚畑
⑤ 高根	⑥ 北割	⑦ 田代	⑧ 古屋敷
⑨ 中道南	⑩ 上溝	⑪ 蔵鹿山麓	⑫ 経ヶ岳山麓
⑬ 西箕輪小学校北	⑭ 伊那養護学校	⑮ 熊野神社	⑯ 在家
⑰ 大萱西	⑱ 殿屋敷	⑲ 宮垣外	⑳ 天庄 1
㉑ 天庄 2	㉒ 上戸	㉓ 富士垣外	㉔ 堀の内
㉕ 小花岡	㉖ 中の原	㉗ 下の原	㉘ 与地山手
㉙ 与地原	㉚ 財木		

西箕輪地区遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生時代			古墳時代		奈良・平安時代				中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	土	須	灰	緑	陶磁	(長野県遺跡地図番号)
1	金鋳場	羽広			○	○	○	○	○						○	○	○	○	○	(2599)
2	桜畑	吹上					○													布目瓦(平安)
3	久保田	大泉新田					○								○	○	○			
4	塚畑	〃					○	○								○				
5	高根	〃					○					○								
6	北割	羽広					○					○								(2602)
7	田代	〃					○													(2601)
8	古屋敷	〃					○					○							○	(2600)
9	中道南	吹上					○													
10	上溝	羽広													○	○	○		○	
11	蔵鹿山麓	〃	○																	
12	経ヶ岳山麓	〃																	○	和鏡
13	西箕輪小学校北	大萱													○					
14	伊那養護学校	〃	○													○				
15	熊野神社	〃					○								○	○				(8678)
16	在家	〃					○													(8679)
17	大萱西	〃	○				○													
18	殿屋敷	梨ノ木					○								○	○			○	(2608)
19	宮垣外	中条			○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○		(2607)
20	天庄1	上戸					○	○							○	○				(2606)
21	天庄2	〃	○		○	○	○	○	○											
22	上戸	〃					○													
23	富士垣外	中条					○													
24	堀の内	〃			○	○	○	○	○										○	
25	小花岡	花岡					○	○							○	○				(2605)
26	中の原	中の原					○					○			○	○	○			
27	下の原	上戸					○													
28	与地山手	与地					○													
29	与地原	〃					○													(2609)
30	財木	羽広					○	○												



第Ⅰ次～第Ⅳ次調査地区（1：10,000）

例　言

1．本書は、平成８年度に実施された温泉活用施設建設土地造成に伴う第Ⅰ次緊急発掘調査、地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う第Ⅱ次緊急発掘調査、平成９年度に実施された地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う第Ⅲ次、第Ⅳ次緊急発掘調査を集大成した埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．この緊急発掘調査は伊那市長の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し発掘調査団に事業を委託して実施した。

3．本調査は、平成９年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図	友野良一	飯塚政美
・土器拓影	本田秀明	
・土器及び陶器実測図	本田秀明	
・石器実測図	本田秀明	

◎写真撮影者

・発掘及び遺構	友野良一	飯塚政美
・遺　　物	友野良一	飯塚政美

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6．出土遺物、遺構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

金鋳場遺跡（第Ⅰ次調査）

目　次

目　　次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……4

第１節　発掘調査に至るまでの経緯……4

第２節　調査の組織……4

第３節　発掘調査日誌……5

第Ⅱ章　調　　査……7

第１節　調査の概要……9

第２節　遺構と遺物……9

（１）縄文時代の遺物……9

第Ⅲ章　所　　見……11

挿図目次

第１図　地形及びトレンチ配置図……7

第２図　第１号トレンチ地層断面図……7

第３図　土器拓影……10

第４図　石器実測図……10

図版目次

図版１　遺跡遠景

図版２　発掘調査状況

図版３　発掘調査状況及び遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった金鋳場遺跡は温泉活用施設建設事業に伴う緊急試掘調査であった。調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに添って記しておく。

平成８年４月２日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成８年６月３日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の２第１項の規定による）を提出する。

平成８年８月５日付けで、金鋳場遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成８年８月５日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成８年８月５日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第２節　調査の組織

緊急試掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	柘植　晃	
事務局	新井良二	（社会教育課長）
〃	鳥原千恵子	（副参事）
〃	宮原　強	（社会教育課長補佐）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	有賀　恵	（　〃　）

発掘調査団

団　　長　　友　野　良　一（日本考古学協会会員）

調　査　員　　飯　塚　政　美（　　〃　　）

作　業　員　　大久保富美子　酒井とし子　有賀秀子　城倉三成　小田切守正

松下末春　原公夫　溝上美弥子（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成８年７月10日　発掘調査に必要な道具類、器材類を春日城跡の発掘現場より伊那市西箕輪羽広に展開している金鋳場遺跡の一隅に運搬する。試掘地区は唐松林であった。

平成８年７月11日　発掘現場のうちで道路に面した一角にスペースハウス１棟、テント２棟を並列して建てる。重機を手配して現場に持ってきていただく。

平成８年７月12日　梅雨明けが来たような暑い一日であった。重機によりトレンチ掘りを南北に進めていく。50cm位で砂礫混合の黄褐色土層に達する。遺物の出土は何もなし。

平成８年７月15日　第１号トレンチの掘り下げをほぼ北側まで進めて完了する。第１号トレンチの西側に南北に第２号トレンチを設定する。縄文中期打製石斧と加曽利Ｅ式土器片が検出された。

平成８年７月16日　第２号トレンチの完掘終了。第１号トレンチの東側に東西にトレンチを入れ、これを第３号トレンチと命名し、夕方までかかって、掘り上げを完了する。第３号トレンチに直交して、北側に、南北に長くトレンチを入れ、第４号トレンチと名付ける。縄文後期初頭の土器片出土。このトレンチ内に黒い落ち込みを発見するが、精査の結果遺構とはならなかった。

平成８年７月19日　第４号トレンチ、第５号トレンチの掘り下げを進めていく。遺物の出土は何も無かった。

平成８年７月22日　第６号トレンチ、第７号トレンチを南から北へ向かってどんどんと掘り進めて行く。後者のトレンチ内より加曽利Ｂ式土器片を発見する。

平成８年７月23日　第７号トレンチの北側に方形状の黒い落ち込みが見られたのでプラン確認に努める。

平成８年７月24日　昨日、多量の縄文後期土器片が出土した周辺を精査したが、遺構は何も検出できなかった。

平成８年７月25日　第８号トレンチ、第９号トレンチを南から北へと掘り進めて行くが、何も遺構・遺物の発見はなかった。

平成８年７月26日　第１号トレンチから第９号トレンチの清掃を済ませ、写真撮影完了。本日にて、重機を現場より引き上げる。

平成８年７月29日　発掘器材の後片付けをする。

平成８年７月30日　第１号トレンチ西壁、第９号トレンチ西壁、それぞれの地層断面図、全測図の作成

平成８年７月31日　発掘器材その他発掘に関係した道具類の点検を実施して運搬しておく。本日にて発掘現場調査は終了の運びとなった。

平成10年１月～平成10年２月　遺物の整理、図版の作成、報告書を印刷所へ送る。

平成10年３月　報告書の刊行　（飯塚政美）

抜根に苦労した試掘調査

重機を十二分に利用した試掘調査

第II章　調　　査

第１図　地形及びトレンチ配置図（１：1,000）

I　耕作土
II　茶褐色土層（粘性に富み、粒子が細かい）
III　黄褐色土層（砂礫が混入）

第２図　第１号トレンチ地層断面図（１：200）

第１節　調査の概要

金鋳場遺跡は現在、畑地、原野、山林に利用されている。第Ｉ次調査地区は全て山林地帯であり、この地区での遺跡の実体は全く不詳であった。従って、試掘調査用のトレンチを入れて調査を進めていった。前述したように唐松林が繁茂しており、抜根に難渋し、場合によっては小型の重機では対応が不可能であった。

調査の結果、遺構の検出は何も無かった。遺物については第２節　遺構と遺物に譲ることにする。

第２節　遺構と遺物

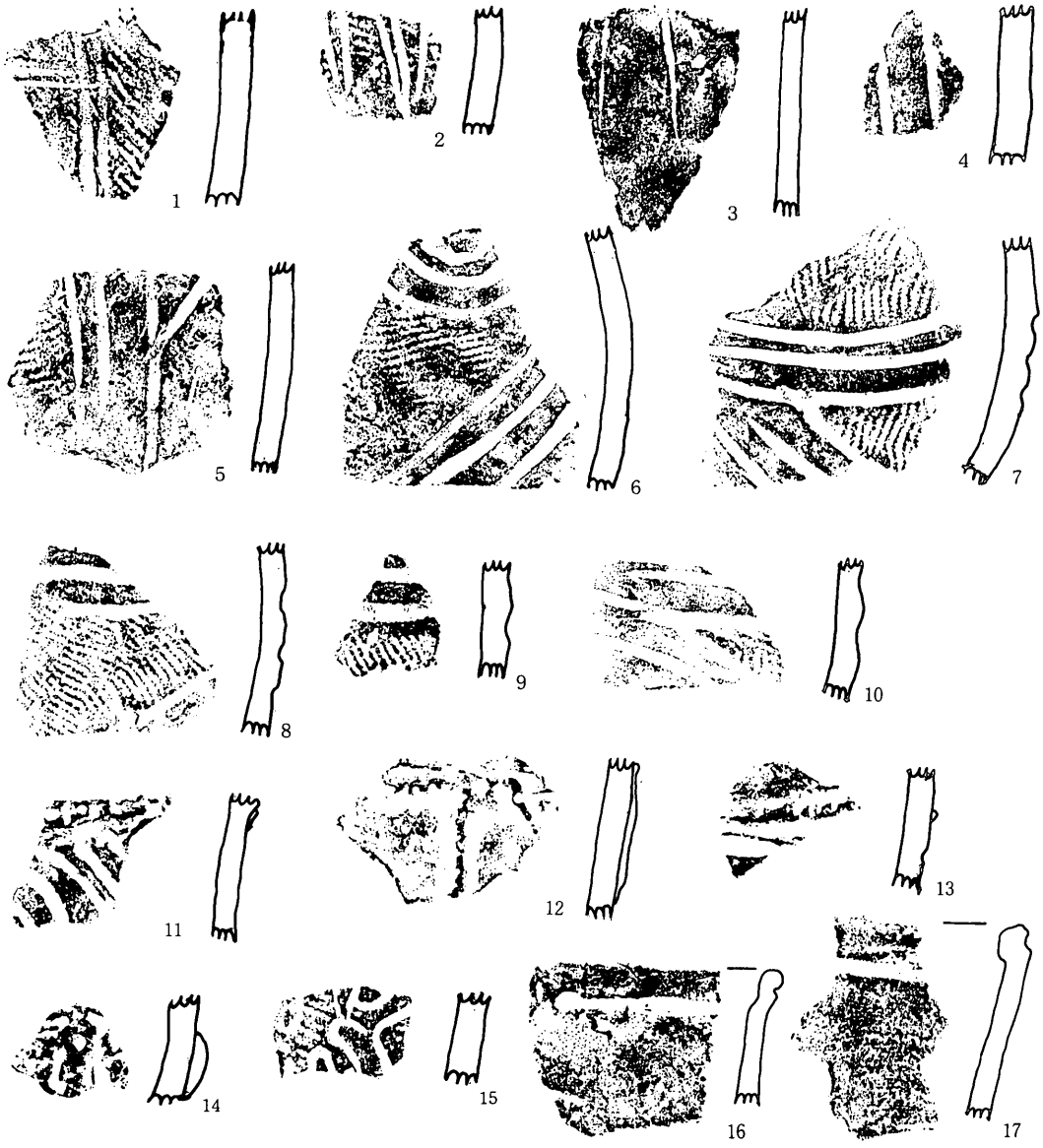
（１）縄文時代の遺物

第３図の（１）は斜縄文地に幅広のヘラによる沈線を二条にわたって垂下させてある。赤褐色を呈し、多量の雲母、長石を含み、焼成は良好。（２）は無文地にヘラ先による沈線を不規則的に配し、それらに囲まれた中へ刺突文を押捺してある。赤褐色を呈し、雲母、長石を含み、焼成は良好。（１～２）は加曽利Ｅ式の新しい方に属していると思われる。（３～４）は中厚手に属し、無文地にヘラによる沈線を斜走や縦走させてある。色調は明黄褐色（３）、黒褐色（４）を呈し、焼成は両方とも良好である。堀の内式の古い方の範疇であろう。

（５～９）は磨消縄文の発達が顕著な一派である。その磨消の仕方が縦位状のもの（５）、曲線を描くもの（６～７）、横位状のもの（８～９）と様々である。色調は５片とも明茶褐色を呈し、焼成は比較的に良好、少量の長石、雲母を含む。（６）の外面に多量の炭化物が附着していた。磨消の状態から見て、（５）は堀の内式の古い方に、（６～７）は堀の内式の新しい方に、（８～９）は加曽利Ｂ式の古い方に、それぞれ編年付けが可能であろう。(10) は入組文風的な磨消縄文で、外面は黒色研磨されている。黒褐色を呈し、焼成は極めて良好で、少量の雲母を含む。安行式の一派であろう。

(11～14) は隆帯の貼り付けが見事な一派である。その貼り付けの仕方に微妙な相違点を見い出す。横位状に貼り付け、その上に連続刺突文を押捺したもの (11、13)、横位に走る隆帯と縦位に走る隆帯が組み合わさったもの (12)、８の字状隆帯文が見られるもの (14) 等である。色調は全般的に茶褐色を呈し、焼成は普通、少量の長石を含む。この一派は加曽利ＢⅡ式から加曽利ＢⅢ式に含まれると想定され得よう。

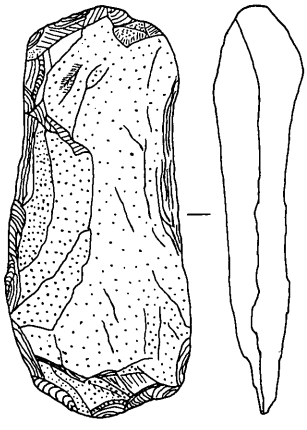
(15) は磨消の仕方が複雑多岐にわたる。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母、長石を含む。安行式の新しい方に属すると思われる。(16～17) は口唇部が丸味を呈し、やや肥厚状態の口縁部破片であり、口唇直下に沈線が一条、明瞭に横走している。明茶褐色を呈し、焼成は良好、少量の長石や雲母を含む。縄文時代晩期初頭に隆盛した大洞Ａ式の一派と思われる。これらの土器片からみて、山麓地域の文化的変遷が理解できる。



第３図　土器拓影（１：２）

第４図の石器は緑色岩製の打製石斧で、中央部がややつぶまり下端部が開き気味の撥形を呈する。上端、下端の突端部付近は剥離が極めて丁寧であり、その他は自然面を多く残す。縄文中期によく見られる一種である。

打製石斧の作り方としては極一般的である。　　（飯塚政美）



第４図　石器実測図（１：３）

第Ⅲ章　所　　見

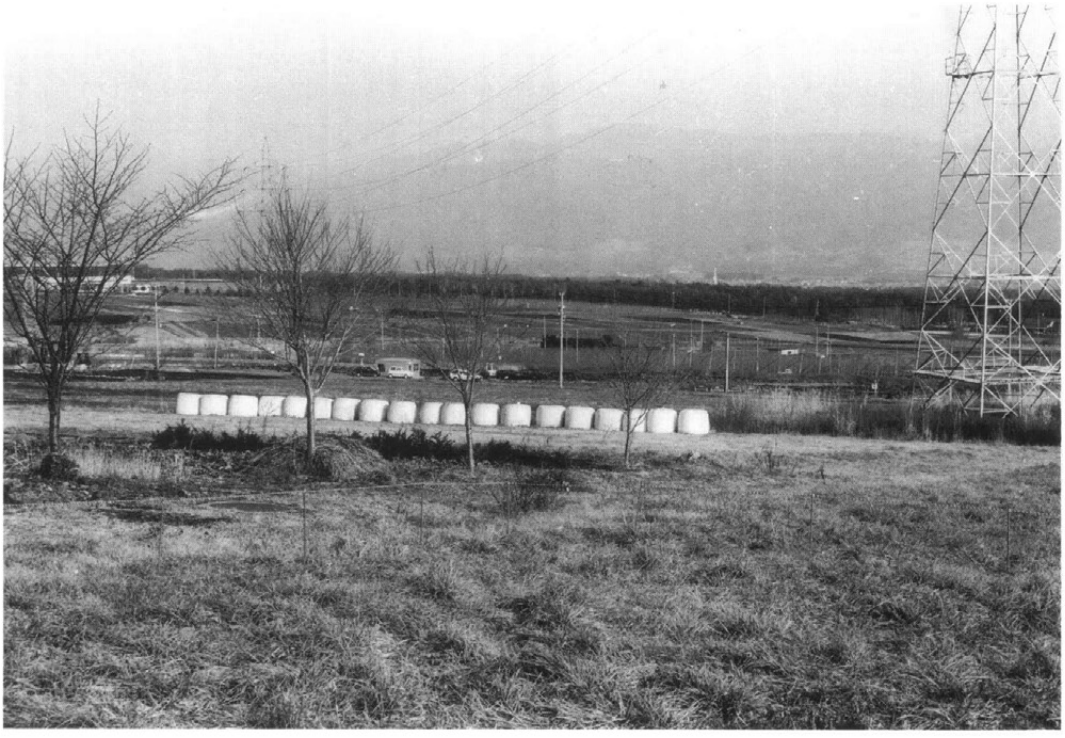
今回発掘調査を実施した地点では再々にわたって述べてきたが、遺構の検出は何もなかったが、遺物は出土している。調査地点は西から東への緩傾斜面に位置し、表土層面下80cm位で砂礫が混入した黄褐色土層面に達する。この土層は山麓地帯によく見られる後背山地の何度にもわたる押し出し土の堆積した姿であろう。

本調査地点より出土した遺物の概要はおよそ次の通りである。縄文中期、縄文後期、縄文晩期の三時期にわたっての土器が出土している。これらを文様及び編年にわたって細分化をこころみてみると次のようになる。沈線状の懸垂文の発達が見られる加曽利Ｅ式、無文地が主文様である堀の内式の古式、磨消縄文手法が縦位状、曲線状に区切られている堀の内式の古式、磨消縄文が横位状に配列されている加曽利Ｂ式、横位状の隆帯の貼り付けが顕著な加曽利Ｂ式、入組文風的な磨消縄文の発達がある安行式、複雑多岐にわたる磨消縄文が工夫されている安行式の新しい方、単純な横位沈線文が走向する大洞Ａ式。

石器に関してはわずかに縄文中期の打製石斧が１点出土している。これらの出土遺物を踏えて、標高の高い山麓線上に縄文後期、縄文晩期の遺跡の存在性が高く実証され、集落の垂直分布の展開に大いに役立つと思われる。　　（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺跡遠景



遺跡地を南西より眺む（上）
遺跡地を西側より眺む（下）

図版2　発掘調査状況

第5号トレンチ（上）
第6号トレンチ（下）

図版3　発掘調査状況及び遺物出土状況

第1号トレンチ（左上）　第2号トレンチ（右上）
土器出土状況（左下）　石器出土状況（右下）

報告書抄録

ふりがな	かないばいせき
書名	金鋳場遺跡（第Ⅰ次調査）
副書名	温泉活用施設建設土地造成
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦1998年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かないば 金鋳場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわはびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成8年7月10日～平成8年7月31日	6,000	温泉活用施設建設土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金鋳場		縄文時代	なし	・縄文時代中期の土器 ・縄文時代後期の土器 ・縄文時代晩期の土器 ・縄文時代中期の打製石斧	山麓線上に縄文後期、縄文晩期の遺跡の存在性が高く実証された。

金鋳場遺跡（第II次調査）

目　次

目　　次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……4

第１節　発掘調査に至るまでの経緯……4

第２節　調査の組織……4

第３節　発掘調査日誌……5

第Ⅱ章　調　　査……7

第１節　調査の概要……9

第２節　遺構と遺物……9

（１）トレンチ内出土遺物……9

第Ⅲ章　所　　見……14

挿　図　目　次

第１図　地形及びトレンチ配置図……7

第２図　土器拓影……10

第３図　土器拓影……12

第４図　土器拓影……13

図　版　目　次

図版１　発掘調査状況

図版２　発掘調査状況

図版３　遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった金鋳場遺跡は地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う試掘調査であった。調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに添って記しておく。

平成８年４月２日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成８年10月17日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の２第１項の規定による）を提出する。

平成８年12月20日付けで、金鋳場遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成８年12月20日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成８年12月20日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第２節　調査の組織

試掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	柘植　晃	
事務局	新井良二	（社会教育課長）
〃	鳥原千恵子	（副参事）
〃	宮原　強	（社会教育課長補佐）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	有賀　恵	（　〃　）

発掘調査団

団　　長　友　野　良　一（日本考古学協会会員）

調　査　員　飯　塚　政　美（　　〃　　）

作　業　員　大久保富美子　酒井とし子　有賀秀子　城倉三成

小田切守正　松下末春（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成８年11月18日　発掘調査に必要な道具類、器材類を伊那市伊那西町小黒原に広がりを持つ小黒南原遺跡発掘現場より伊那市西箕輪羽広に展開している金鋳場遺跡の一隅に運搬する。今回の試掘調査地区は夏場の調査地区より東方へ300m位いった一帯であった。

平成８年11月19日　昨日、運搬した器材類の整理、整頓を実施する。

平成８年11月20日　発掘地点の南側に、幅２m位のトレンチを東西に入れて掘っていく。トレンチ内のところどころから縄文中期中葉土器片、加曽利Ｅ式土器片が出てきた。耕土は浅く、30cm～40cm位であった。

平成８年11月21日　昨日に引き続き、北側のトレンチ掘りを続行していくが、昨日に比較して遺物の出土量は少なかった。出土遺物に混じって灰釉陶器の破片があった。

平成８年11月25日　第３号トレンチを掘り下げていくが、遺構の検出はない。ところどころに、縄文中期土器片が出土。

平成８年11月26日　第４号トレンチの掘り下げを進めていく。須恵器片の出土はあったが、遺構の検出はなかった。

平成８年11月28日　トレンチの設定間隔を20m位あけて東西に入れる。これを掘り進めていくと縄文中期後葉加曽利Ｅ式土器の突起のほんの一部分が出土した。

平成８年11月29日　トレンチを北側の畑へ東西に入れて掘り進めていくが、数片の土器片が出土したのみで、遺構の検出はなかった。

平成８年12月３日　北側から２本目のトレンチを掘り進んでいくが、遺物の出土は何もない。

平成８年12月４日　住居址１軒が検出された。

平成８年12月６日　住居址の北側に二本トレンチを入れる。遺構の検出はないが、縄文中期土器片、灰釉陶器片の出土があった。

平成８年12月10日　トレンチ掘りを北へ、北へと進めるが、遺構の検出はなかった。

平成８年12月11日　前日と同様な作業を行ったが、何も成果はなかった。

平成８年12月12日　前日と同様であった。

平成８年12月13日　第９号トレンチの掘り下げを完了する。第５号トレンチの西側を掘り下げていくと新たに２軒の住居址が確認された。今までに検出された遺物を取り上げる。各々の

トレンチの写真撮影を終了。

平成８年12月16日　第５号トレンチの西側を掘り進める。全測図の作成。

平成８年12月17日　第５号トレンチの北側に第10号トレンチを設定しておいて、発掘をする。全測図の作成。

平成８年12月18日　前日と同様な作業をする。本日にてトレンチ掘りを全て完了する。

平成８年12月19日　道具の後片付けをする。

平成８年12月20日　道具を運搬する。

平成10年１月～平成10年２月　遺物の整理、図版の作成、原稿執筆、報告書を印刷所へ送る。

平成10年３月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）

凍てついた地面での発掘調査

第１図　地形及びトレンチ配置図（1：1,000）

第１節　調査の概要

金鋳場遺跡は現在、畑地、原野、山林に土地利用がなされているが、今回の第Ⅱ次調査地区は全面的に畑作振興に活用され、伊那西部地区の野菜地帯の一翼を担っている。調査地区は西から東へのなだらかな山麓扇状地面に立地しており、山麓部から押し出した堆積土が厚く覆っていた。よって、調査を開始した時点で、遺構の検出土層面の確認に手こずった。各々のトレンチ内より出土量の差違はあったが、遺物は相当量の出土をみた。遺物の主体は縄文中期と平安時代にしぼられた。

最終的に、縄文中期の竪穴住居址１軒、平安時代の竪穴住居址２軒の検出をみたが、調査期間が冬に向っていたので、これについては、平成９年度に実施することに決定した。これについての調査成果は第Ⅲ次調査報告書に掲載してある。

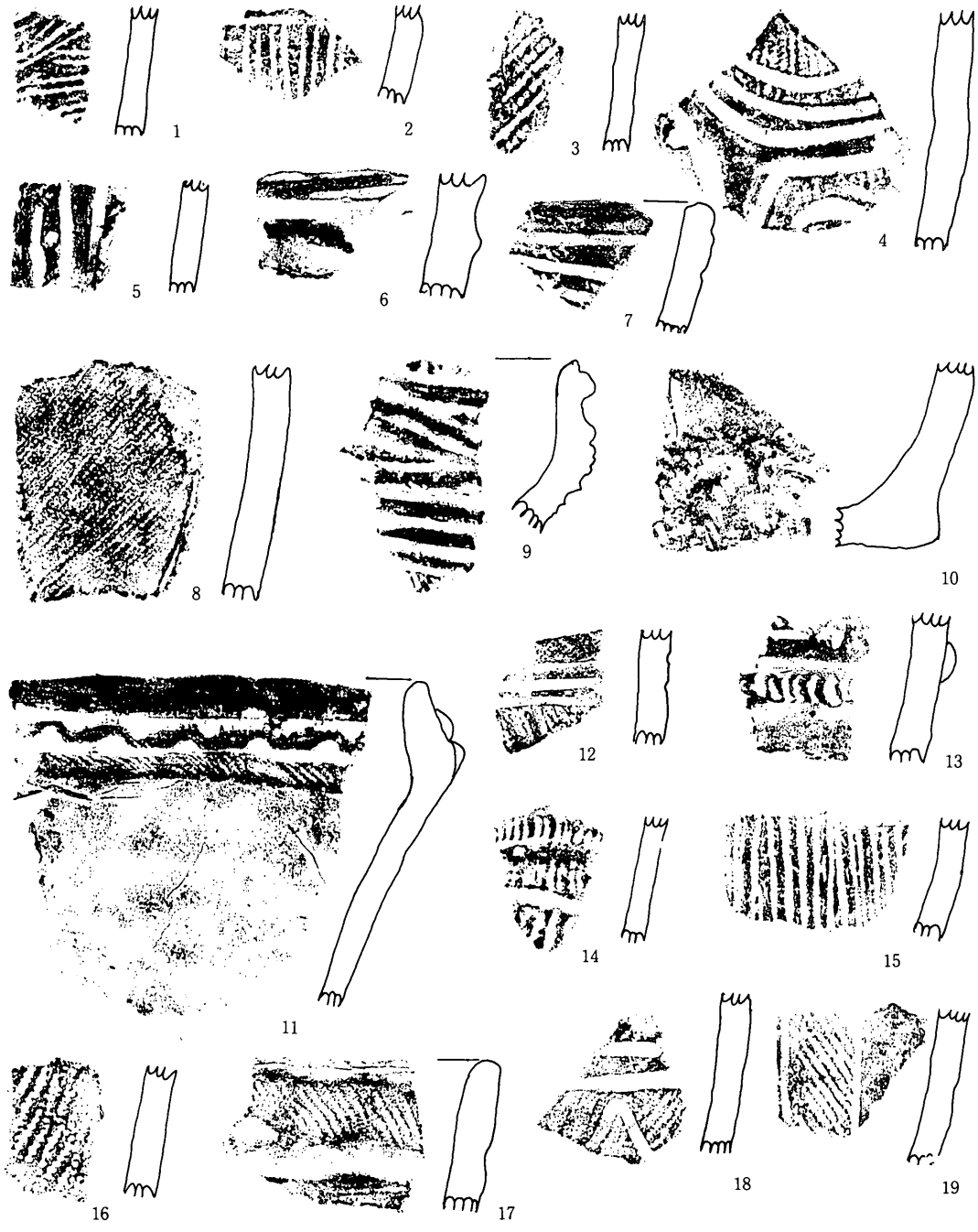
第２節　遺構と遺物

（１）トレンチ内出土遺物

第２図（１～７）は**第１号トレンチ内**より出土した土器片である。沈線が主体文様を構成し、そのうちそれが交斜状（１）、縦位状（２）にそれぞれ配されている。ともに赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好。（１～２）は縄文中期初頭に位置づけられる。（３～４）は縄文が下地文様を成し、（４）にいたってはヘラ状工具による沈線文が同心円状に数本入り、さらにその間に隆帯を付け、全体的には磨消縄文様式をかもし出している。ともに赤褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は良好。縄文中期中葉に含まれる。（５～７）は縄文中期後葉の加曽利Ｅ式の一派であろう。（５）は隆帯の懸垂文が垂下し、（６～７）はヘラによる幅広の沈線が横位状に走る。３片とも赤黒褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は中位である。

（８～11）は**第２号トレンチ内**より出土した土器片であり、（８、10）は外面全体に斜縄文が見事に発達している。(10) は屈折底の様相を呈する。（９、11）はやや外反する口縁部破片で、厚手に属する。（９）は断面が丸味状を呈する隆帯を横位状に規則的に配し、黄褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は中位。(11) は破片上部に文様帯が横位に集中して配され、破片の中・下部は無文帯が占めている。赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好。（８～11）は縄文中期中葉の勝坂式の一派であろう。

(12～19) は**第３号トレンチ内**より出土した土器片であり、文様は爪形文が主流 (13～14)、沈線文が横位と斜目状に組み合わさったもの (12、18)、沈線が縦位状に無数にわたって走向している (15)。縄文地だけのもの (16)、沈線と縄文が単純に合わさったもの (17、19) 等々と多種多様であった。色調は赤褐色 (12～16)、黒褐色 (17、18)、明黄褐色 (19) をそれぞれ呈し、全ての破片に多量の雲母を含む。焼成は全て良好である。(12、15) は縄文中期初頭、(13、14、16) は縄文中期中葉、(17～19) は縄文中期後葉に含まれると思われる。



第２図　土器拓影（１：２）

第３図（20～29）は**第４号トレンチ内**より、出土した土器である。(20) は口唇部がやや丸味を呈する口縁部の破片で、中央部付近に高い隆帯を横位に貼り付け、その上に斜目の沈線が走り、変化を富ませている。上部文様は細かな斜縄文、中部文様は横位の沈線が隆帯の直下に二条ずつ施文してあり、その下に沈線が斜走している。赤褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好

である。縄文中期初頭に位置づけられる、いわゆる平出ⅢA式に属していると思われる。

(21～27) は縄文中期中葉に編年づけられている類であり、文様は次のように様々であった。沈線による縦位状の区画文 (21～23)、爪形文の発達が顕著なもの (24、25)、見事な縄文が施されていたもの (26、27)。色調は赤褐色 (21～23、25～27)、黒褐色 (24) を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。(28～29) はミミズク状把手の部類に属し、隆帯と刺突文にて文様の意匠効果を増している。双方ともに赤褐色を呈し、雲母、長石を多量に含み、焼成は良好であり、勝坂期の最盛期の所産であろう。

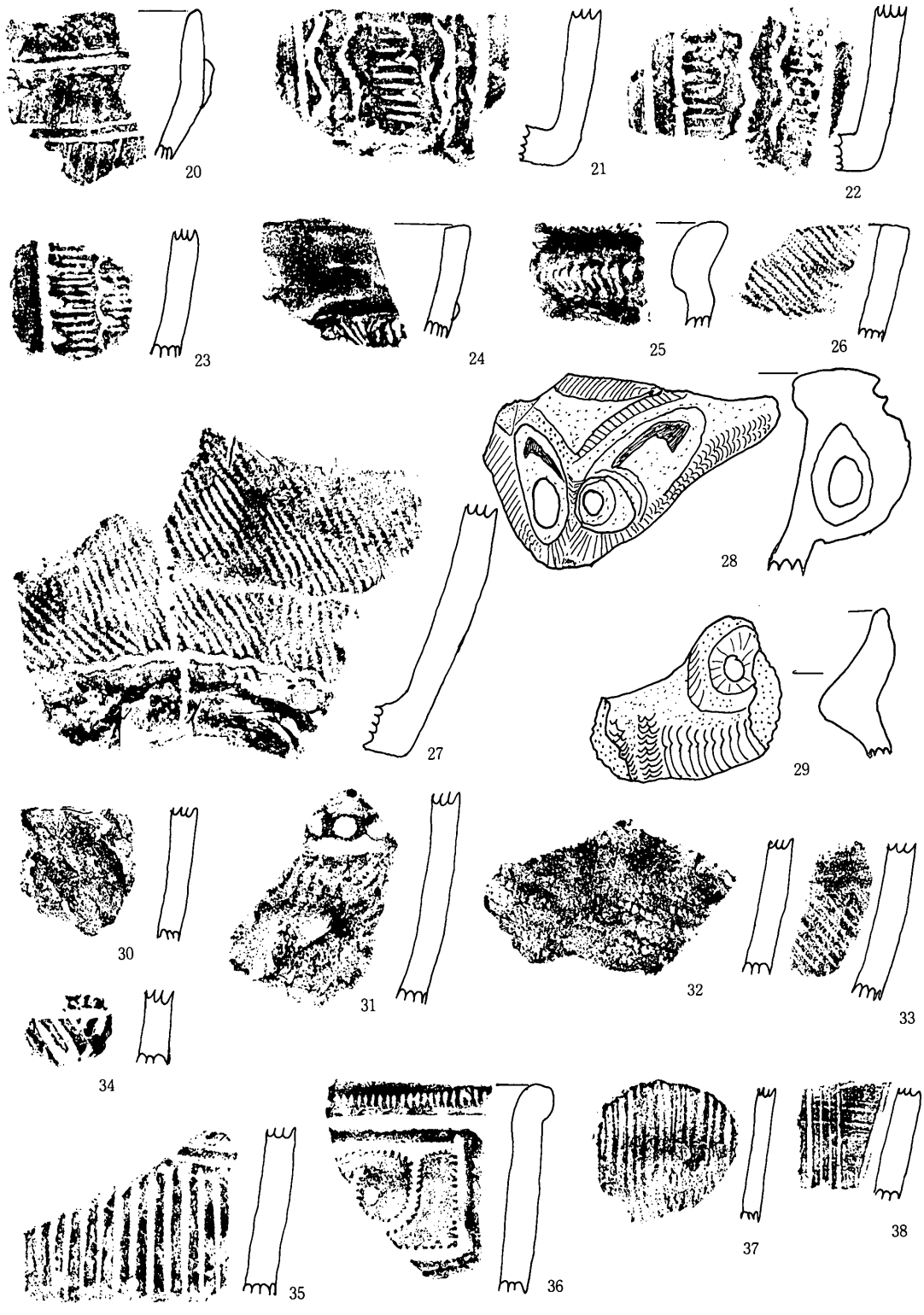
第3図 (30～38) は**第5号トレンチ内**より出土した土器である。(30、31) は胎土中に多量の繊維を含む、繊維土器の一派である。外面に刺突文 (30)、(31) には外面に斜縄文地と横位隆帯文と、その上に円形刺突文を押捺してある。双片ともに赤黒褐色を呈し、焼成はやや悪い。(30) は縄文早期終末期の茅山上層式、(31) は縄文前期前葉の関山式の一派と想定される。(32) は外面全面に斜縄文が及んでいる。多量の雲母を含み、赤褐色を呈し、焼成は良好である。縄文前期後葉の諸磯式系統の一派と想定される。

第3図 (33～35) は沈線の走向が主文様であり、その施文方法は交叉状 (33～34)、縦位状 (35) の二つに大別できる。3片とも赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好で、縄文中期初頭に位置づけられる。(36) は方形状の区画文が形成され、区画された沈線文の縁に細かな刻目文が見られる。黄褐色を呈し、焼成は良好で、縄文中期中葉の藤内式に含まれるのであろう。(37) はカキ目痕が明瞭な平安時代土師器。(38) は江戸時代の鉄釉の掛かった摺鉢の破片である。

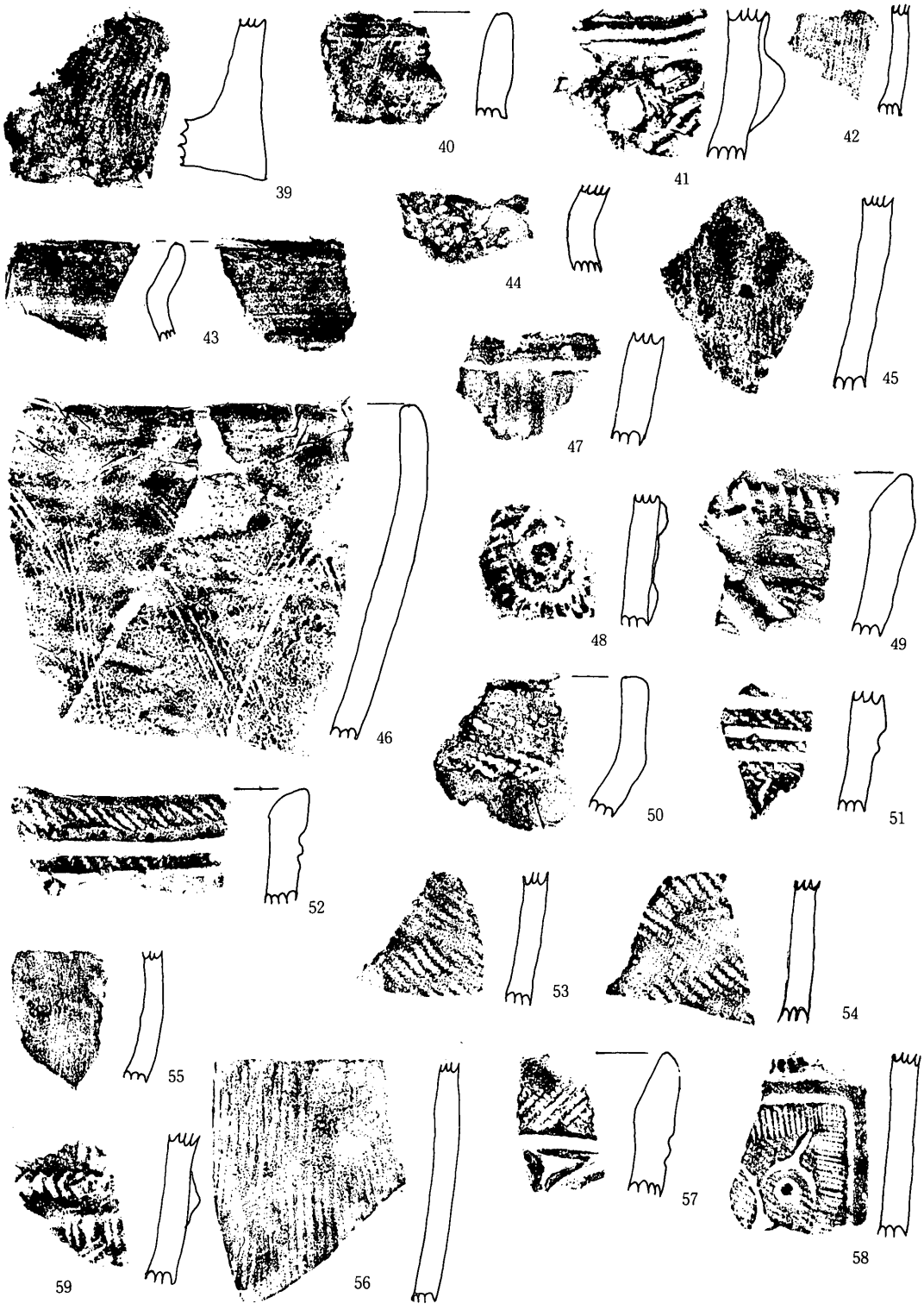
第4図 (39～43) は**第6号トレンチ内**より出土した土器片である。(39) の外面は斜縄文地に覆われ、やや屈折底状を呈する。赤褐色を呈し、縄文中期中葉頃の作であろう。(41) も同じ時期に含まれ、瘤状の隆帯がよく見られる。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は普通。(40) は斜状沈線文と、横位沈線文が規則的に組み合わさっている。黒褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好、縄文中期初頭頃に位置づけが可能であろう。(42～43) は平安時代土師器片であり、前者はカキ目、後者は細かな沈線が見られる。

第4図 (44～49) は**第7号トレンチ内**より出土した土器片である。(44) は繊維を少量含み、くずれた縄文を施してある。黒褐色を呈し、焼成は良好である。黒浜式の一派と思われる。(45～46) は同一個体であり、細かな交互状沈線文の上にボタン状の瘤状突起が見られ、諸磯C式の特徴を如実に物語っている。茶褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。外面に炭化物が附着している。(47) は幅広ろの横位の沈線と縦位の沈線の組み合わせた縄文中期初頭の土器片であり、赤褐色を呈し、焼成は良好、多量の長石を含む。(48～49) は縄文中期中葉の土器片で、瘤状の突起文 (48)、連続刺突文 (49) がそれぞれ施されている。赤褐色 (48)、茶褐色 (49) を呈する。

第4図 (50～52) は**第8号トレンチ内**より出土した土器片である。多量の雲母を含み、文様の特徴から諸磯系統の一派と想定される。器の外面全体に斜縄文が及んでいるもの (50)、斜縄



第３図　土器拓影（１：２）



第４図　土器拓影（１：２）

文地に横位の沈線文が走るもの（51～52）の二大別が可能である。色調は黒褐色（50）、赤褐色（51）、茶褐色（52）を呈し、焼成は3片とも良好である。

第4図（53～56）は**第9号トレンチ内**より出土した土器片である。(53～54）は少量の繊維を含み、細かな斜縄文が明瞭に施された黒浜式系統の一派であろう。ともに赤褐色を呈し、焼成は良好である。(55～56）は平安時代の遺物で、前者はカキ目の見られる土師器、後者は叩き目がよく施された須恵器である。

第4図（57～59）は**第10号トレンチ内**より出土した土器片である。(57）は多量な雲母を含み、斜縄文地を三角形状に区切り、変化を富ませている点からみて、諸磯式系統と察せられる。赤褐色を呈し、焼成は良好である。(58）は縦位状の区画文が構成されているもので、黄褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好であり、藤内Ⅰ式であろう。(59）は大きな連続爪形文が全面に及び、仕切り用の隆帯が一本、横位状に加飾されている。赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好、井戸尻式の仲間と思われる。（飯塚政美）

第Ⅲ章　所　　見

平成8年11月から開始した金鋳場遺跡（第Ⅱ次調査）は同年12月下旬をもって現場での作業を終えた。調査を開始した11月下旬は小晴日よりが続き、作業も順調であったが、12月に入り、寒気が訪ずれて、一朝あけて、現場へ行ってみれば、シートの下には一面の霜柱が累々と厚く覆っていた。

幸いにして、何の事故もなく調査が完了したことは誠に有難く、作業員の皆様、調査団の各位、関係諸機関の絶大なる御協力があったことに対し、深甚なる謝意を捧げる。

発掘に関しては、一度、土地改良事業を実施した地区であったにもかかわらず、当初、想定していた以上の成果を収めることが出来た。それらの成果を極、簡潔に述べて所見とする。

遺構としては縄文時代中期の竪穴住居址1軒、平安時代の竪穴住居址2軒が検出されたが、冬場にさしかかる日程のために本格的な調査は春を待って実施することに決定し、あくまでもトレンチ掘りを主体とする方針を固めた。出土遺物を編年的に追ってみると次のようになる。縄文早期終末期の茅山上層式、縄文前期前葉期の関山式、縄文前期後葉の諸磯式、縄文中期初頭の梨久保式、九兵衛尾根式、縄文中期中葉の新道式、井戸尻式、藤内式、勝坂式、縄文中期後葉の加曽利E式、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、江戸時代の陶器。以上を総合して考えてみると、金鋳場遺跡のうち、この地区は各時代の遺物が出土しており、複合遺跡的な位置づけが確証された。（飯塚政美）

図　　版

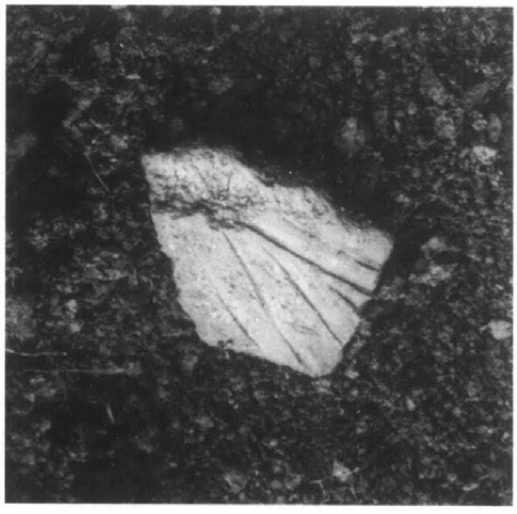
図版1　発掘調査状況

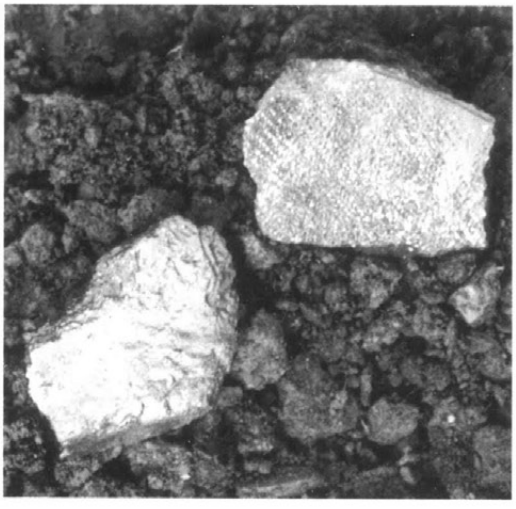
第１号トレンチ（左上）　第２号トレンチ（右上）
第３号トレンチ（左下）　第４号トレンチ（右下）

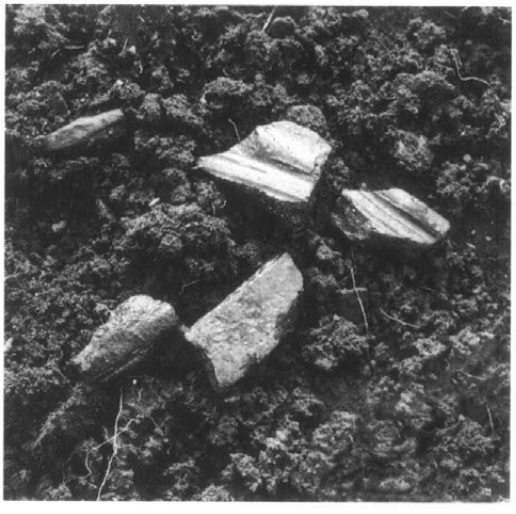
図版2　発掘調査状況

第6号トレンチ（左上）　第7号トレンチ（右上）
第8号トレンチ（左下）　第9号トレンチ（右下）

図版3　遺物出土状況







土器出土状況

報告書抄録

ふりがな	かないばいせき
書名	金鋳場遺跡（第II次調査）
副書名	地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦1998年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かないば 金鋳場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわはびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成8年 11月18日～ 平成8年 12月20日	20,000	苺団地 土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金鋳場		縄文時代 平安時代 江戸時代	なし	・縄文時代早期の土器 ・縄文時代前期の土器 ・縄文時代中期の土器 ・平安時代の土師器 ・平安時代の須恵器 ・平安時代の灰釉陶器 ・江戸時代の陶器	各時代の遺物が出土しており、複合遺跡の位置づけが確証された。

金鋳場遺跡（第Ⅲ次調査）

目　次

目　　次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……4

第１節　発掘調査に至るまでの経緯……4

第２節　調査の組織……4

第３節　発掘調査日誌……5

第Ⅱ章　調　　査……7

第１節　調査の概要……9

第２節　遺構と遺物……9

（１）縄文時代の遺構と遺物……9

（２）平安時代の遺構と遺物……12

第Ⅲ章　所　　見……19

挿　図　目　次

第１図　遺構配置図……7

第２図　第２号住居址実測図……9

第３図　第２号住居址出土遺物分布図……10

第４図　第２号住居址出土土器拓影……11

第５図　第１号住居址実測図（上）
第１号住居址カマド断面図（下）……13

第６図　第１号住居址出土遺物分布図……14

第７図　第１号住居址出土遺物実測図……15

第８図　第３号住居址実測図・第１号土坑実測図（上）
第３号住居址カマド断面図（下）……16

第９図　第３号住居址・第１号土坑出土遺物分布図……17

第10図　第３号住居址出土遺物実測図……18

第11図　第３号住居址出土遺物実測図……19

図　版　目　次

図版１　遺　構

図版２　遺　構

図版３　遺　構

図版４　遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった金鋳場遺跡は地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う緊急発掘調査であり、平成８年12月に実施して検出された遺構を中心とした地区の発掘調査であった。調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに添って記しておくことにする。平成８年９月26日に長野県教育委員会と伊那市とで保護協議を実施する。

平成９年４月１日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成９年４月９日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の２第１項の規定による）を提出する。

平成９年５月２日付けで、金鋳場遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成９年５月２日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成９年５月２日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第２節　調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	柘植　晃	
事務局	新井良二	（社会教育課長）
〃	鳥原千恵子	（副参事　女性室長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育係長）
〃	矢澤謙一	（社会教育青少年係長）

事　務　局　飯　塚　政　美（社会教育係）

〃　有　賀　　恵（社会教育係）

発掘調査団

団　　長　友　野　良　一（日本考古学協会会員）

調　査　員　飯　塚　政　美（　　〃　　）

〃　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）

作　業　員　城倉三成　那須野進　織井和美　有賀秀子　松下末春　酒井とし子

溝上美弥子　小田切守正　大久保富美子（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成９年４月15日　バックフォーを使用して住居址のプランを確認し、第１号住居址と命名して掘り始める。土師器、須恵器、灰釉陶器片が出土し、平安時代の竪穴住居址となった。

平成９年４月16日　昨日、掘り進めた第１号住居址をほぼ掘り上げる。同時に、重機を用いて耕土剝ぎを実施し、第１号住居址の西側に落ち込みを発見し、精査の結果、住居址となり第２号住居址と名付ける。住居址の掘り込み面までは表土より１ｍ程の数値を示していたために、平面プラン確認までに時間を要したが、夕方までにはほぼ把握できた。

平成９年４月18日　第１号住居址のセクション図完成後、このベルトの土を取り除く。午後第１号住居址の西側に位置している第２号住居址を掘り進めていくと、楕円形状の平面プランを呈する縄文中期中葉（藤内期）の竪穴住居址と判明した。

平成９年４月21日　第１号住居址のドットマップ図の作成と柱穴の掘り下げを進めながら第２号住居址の南北のセクション図を完成する。第２号住居址の掘り下げを続け、柱穴を確認し、半分だけ、残して、掘り下げる。炉が確認できた。これは細礫を利用した方形石囲炉で、時期的にみて、やや小型であった。

平成９年４月24日　第２号住居址の西側に近接して方形状の黒い落ち込みが発見され、これを第３号住居址として捉えた。この住居址の第一回目のドットマップ図を完成し、ただちに遺物を取り上げ、さらに、下層へと掘り進めて行く。第２号住居址のドットマップ図を作成終了後、柱穴に番号を明記して、それに基づき、一つ、一つの地層を実測する。

平成９年４月25日　第１号住居址、第２号住居址の掘り下げを全て完了し、写真撮影が出来るように万端を配した。第３号住居址に関して第二回目のドットマップ図を作成し終え、東西のセクションを実測して、掘り下げを続行する。

平成９年４月28日　第３号住居址の床面を調査して、柱穴を確認し、これを地層堆積が明確になるように残して、下へ掘り進める。

平成９年５月１日　第１号住居址、第２号住居址、第３号住居址の清掃を終えて、写真撮影

を済ませる。引き続いて、第1号住居址、第3号住居址のカマド、それぞれをカッティングして、実測を成し遂げる。

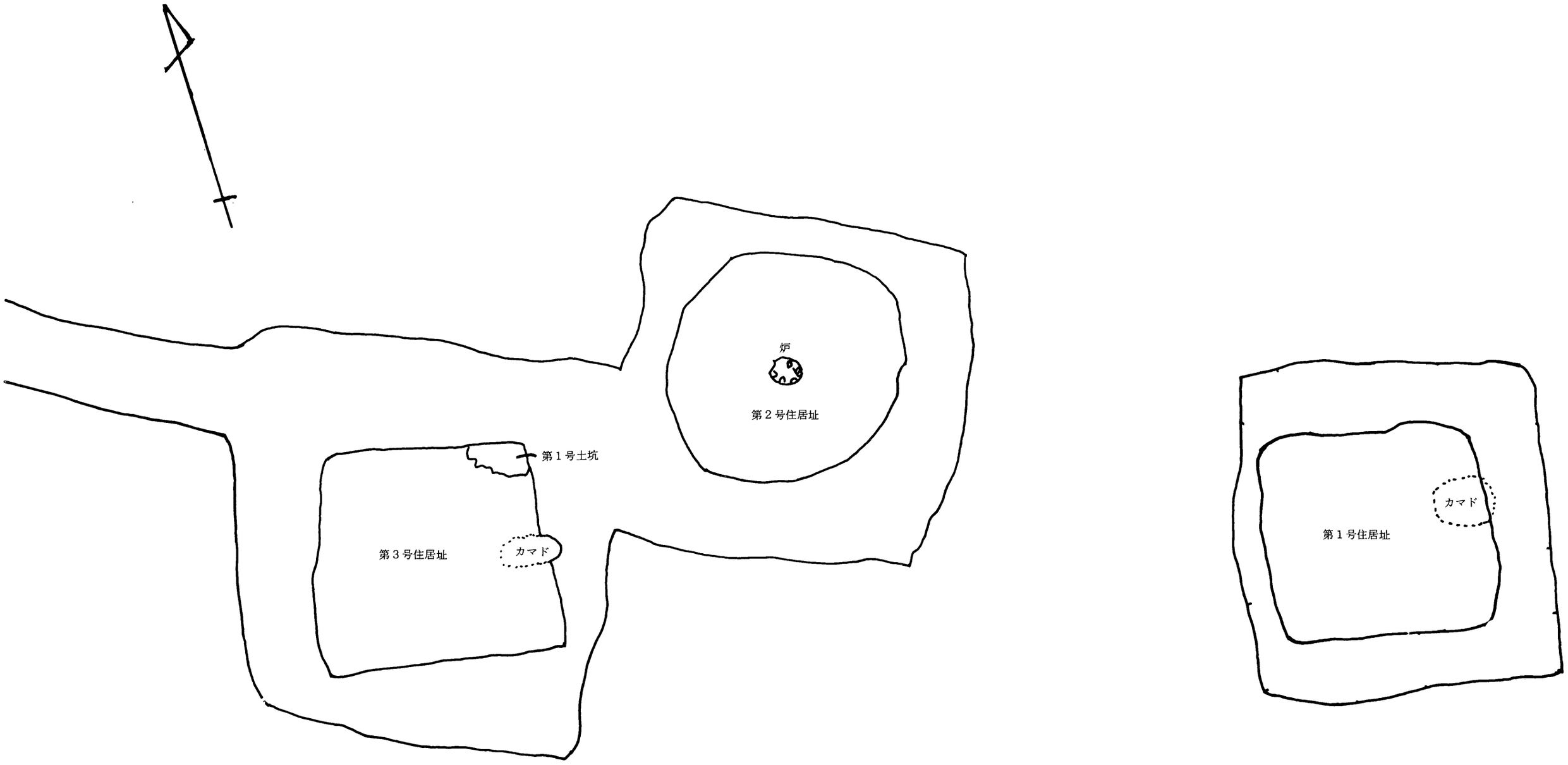
平成9年5月2日　第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の実測図を全て作り上げて、つづいて全測図と第1号住居址のカマド並びに第3号住居址のカマドの詳細な実測を終了して、発掘調査の全工程を閉じた。

第1号住居址を精査する

平成10年1月～平成10年2月　遺物の整理、図版の作成、原稿執筆、報告書を印刷所へ送る。

平成10年3月　報告書を刊行する。　(飯塚政美)

発　掘　風　景



第１図　遺構配置図（１：100）（注 遺構の存在する地形は第II次調査の第１図　地形及びトレンチ配置図を参照のこと）

第１節　調査の概要

金鋳場遺跡周辺の土地利用は第Ⅰ次・第Ⅱ次調査に触れてあるので、今回は割愛する。調査の主体は平成８年12月に検出された縄文中期中葉の竪穴住居址１軒と平安時代の竪穴住居址２軒、平安時代の土坑１基に限定された。従って、これらの遺構に伴っての相当量の遺物が出土した。

遺物に限って土器・陶器類を見てみよう。特に、土器については編年的な見方をすると、縄文中期中葉の藤内式が主流であった。土師器に関しては全て平安時代後期頃に該当すると思われ、それらに伴出して須恵器・灰釉陶器が出土している。

第２節　遺構と遺物

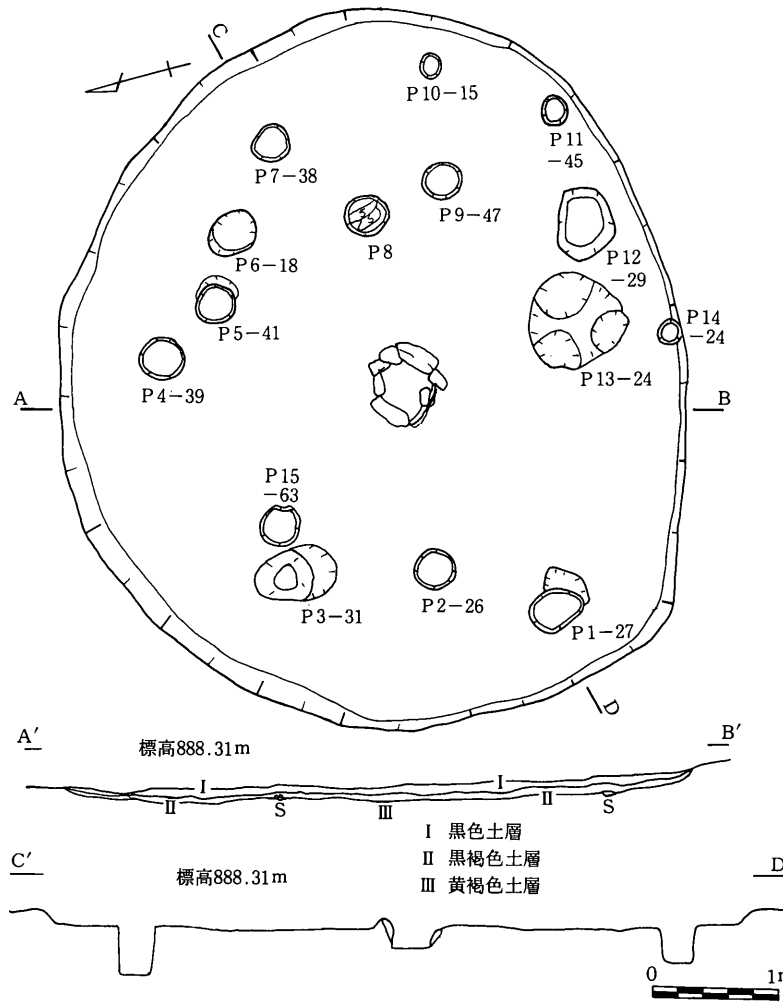
（１）縄文時代の遺構と遺物

第２号住居址（第２～３図　図版１）

本址は第Ⅱ次調査時に第10号トレンチ内に検出され、東側は第１号住居址、西側は第３号住居址に近接している。

表土面より70cm位下った砂礫混合の黄褐色土層を掘り込み構築した竪穴住居址である。平面プランは一部にやや角張りを有するが、全般的に東西に長軸を持つ楕円形状を呈している。規模は南北４ｍ95cm位、東西５ｍ65cm位を測る。

検出土層面は西から東へ傾斜している



第２図　第２号住居址実測図

ために、壁高は西でやや高く、東へいくに従って低くなっている。それらの数値は前者で30cm位、後者で15cm位を測る。その状態はやや外傾気味で、若干の凹凸を認め、面に細礫が露出していた。

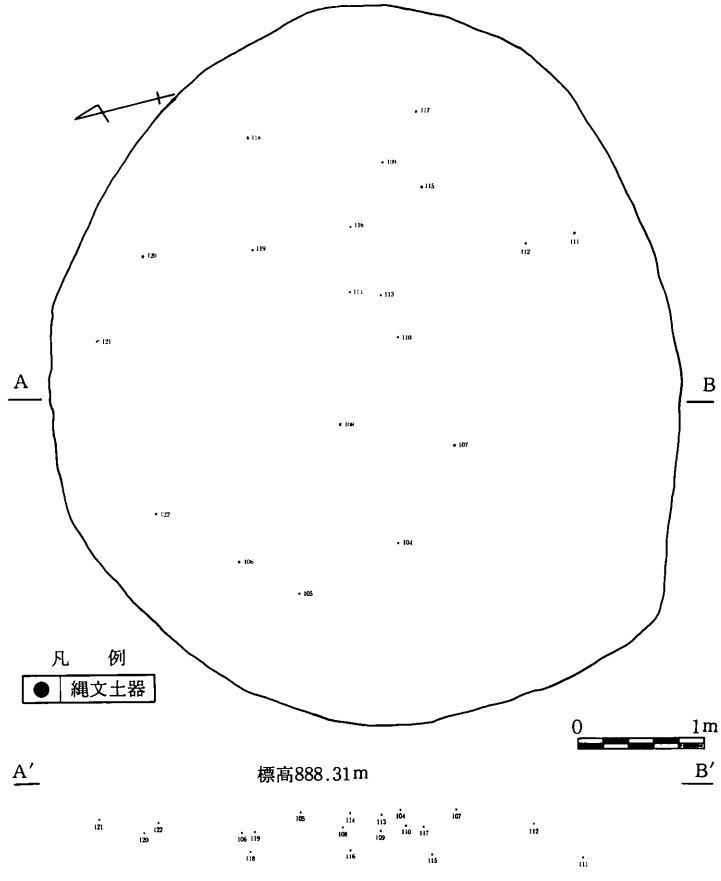
床面は部分的には凹凸を認めるが、全般的には大般平坦である。いたるところに細礫が露出していたが、かたい叩きが全面に及んでいた。炉は住居址の中央部付近に設置され、南北60cm位、東西65cm位の規模を成す方形石囲炉で、炉底は平坦状であった。炉石は大部分が変成岩質で赤く変色していた。焼土の堆積はほんの微量であった。

柱穴は壁に沿って全周的に存在していたが、これらはその配列からして主柱穴と補助穴とに大別できる。柱穴の深さからして、主柱穴になりそうなのはP1、P2、P3、P4、P5、P7、P9、P15等々であろう。炉の規模及び出土土器からして、本址は縄文中期中葉の藤内期と想定できえよう。

遺物　(第4図)

第4図に掲載した土器片は全て第2号住居址覆土中より出土したものである。(1～3)は鋭角状のヘラによる細かな沈線文の発達が見事なものであり、(1、2)は施文が縦位、斜走している。(3)は無文帯部の中央部付近に沈線が数本にわたって縦走して、変化を保っている。3片とも赤黄褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含んでいる。縄文前期終末期から縄文中期初頭にかけてよく隆盛している一派である。いわば、信濃に於ける踊場式から梨久保式の範疇に含まれる。本住居址との関連性を考えてみるに、飛び込み的な存在であろう。

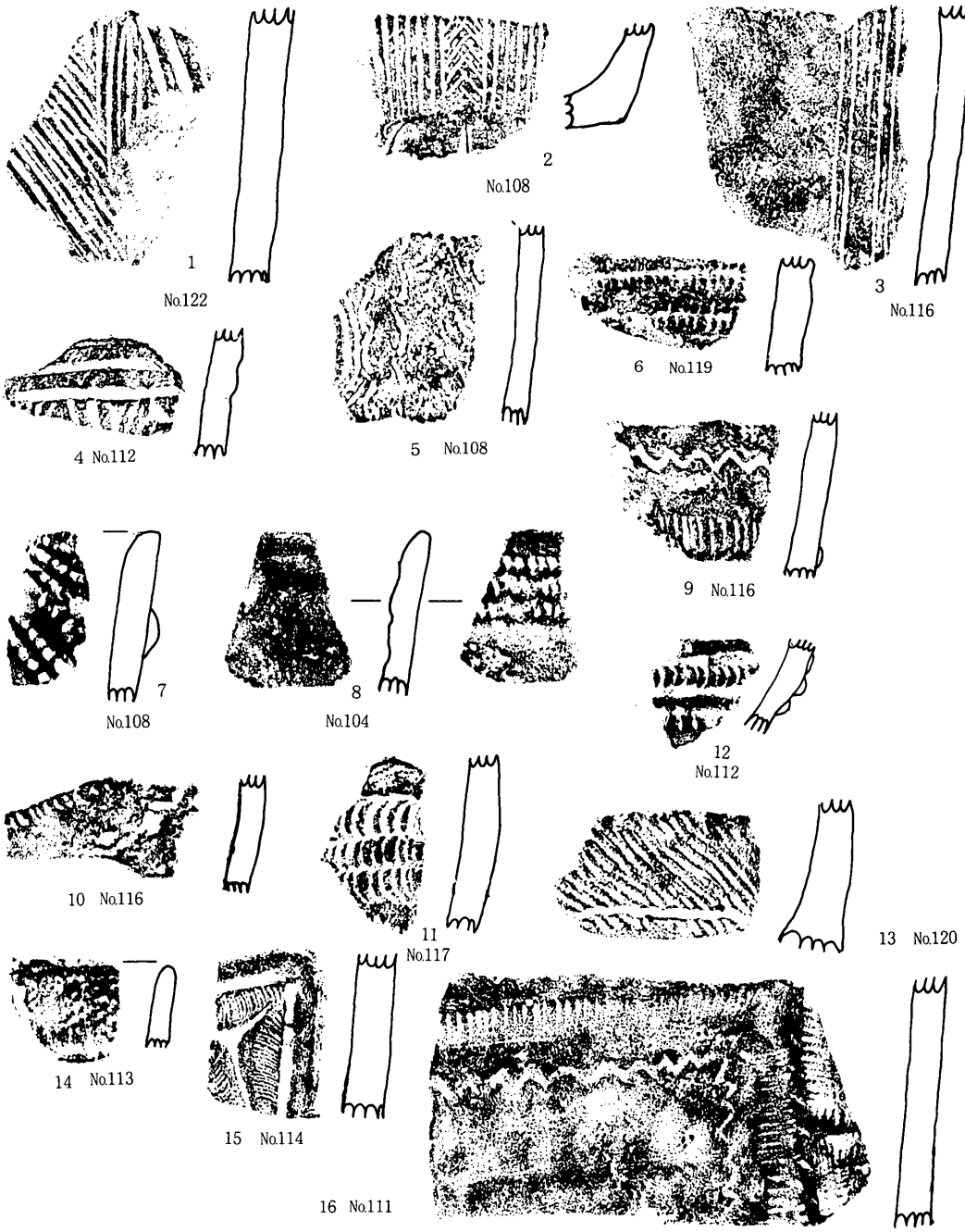
(4)は斜縄文地に、それを磨消すようにして、幅広ろの沈線を二条にわたって横走させ、さらに、それに直交するように沈線を垂下させてある。赤褐色を呈



第3図　第2号住居址出土遺物分布図

し、多量の雲母を含み、焼成は良好である。梨久保式の仲間に含めてもよかろう。

（5）は器厚が6㎜程度を測り、いわば中厚手に属す。やや乱れた斜縄文地に結節S字状文が垂下し、編年的特色をよくかもし出している。多量の雲母や長石粒が器面に浮き出して見え、それの光沢が鮮明に目に写る。茶褐色を呈し、焼成は良好、梨久保式から尾を引く九兵衛尾根式の古い形式の一つであろう。



第4図　第2号住居址出土土器拓影（1：2）

（6～8）は規則的な連続爪形文が押捺されている部類である。（6～7）は文様的意匠として隆帯を貼り付ける工夫をこころみている。（8）はやや外反する浅鉢型土器口縁部破片であって、外面は無文、内面は三段にわたる横位状連続刺突文を配してある。3片とも赤茶褐色を呈し、焼成は中位、多量の長石、雲母を含んでいる。

（9、10、16）は波状沈線文と、通称キャタピラ文が組み合わさり、文様構成が成されている。（9、10）は同一個体。3片とも赤褐色を呈し、焼成は中位、多量の長石を含み、それが器の内、外面に白々と露出している。新道式の一派に含まれていると思われる。

（11～12）は連続爪形文が横に走向している。爪形文の施文方法はくの字状の鋭角に（12）、なめらかな彎曲を描くC字状に（11）に大別でき、これによって地域差を読み取ることが可能であろう。色調は赤褐色（11）、赤黄褐色（12）を呈し、焼成は中位で、少量の長石を含み、梨久保式の一派であろう。

（13～14）は外面全体にわたって斜縄文が充満している。底部に近い付近の破片（13）、口唇部は丸味状を呈し、小型の土器（14）と各種各様となっている。ともに赤褐色を呈し、焼成は良好、長石粒を含む。藤内期の一派であろう。（15）は縦位状の区画文の発達が顕著であり、黒褐色を呈し、焼成は中位で、多量の長石や雲母を含んでいる。区画文が隆盛する藤内期の土器片であろう。この土器片は床面上に密着して検出され本址の時期決定に最も役立った資料である。

（2）平安時代の遺構と遺物

第1号住居址　（第5～6図　図版2）

本址は単独な姿で検出され、西側に近接して、第2号住居址、第3号住居址が発見された。表土面から40cm位下った砂礫を混合した黄褐色土層面を掘り込んで構築した隅丸方形状の竪穴住居址である。規模は南北4m35cm位、東西4m75cm位の数値を示している。壁高は掘り込み面が西から東への傾斜のため、西はやや高く、東は低くなり、それぞれ前者は30cm位、後者は10cm位を測定できる。西壁ともにやや外傾し、壁面に細礫が露出している。

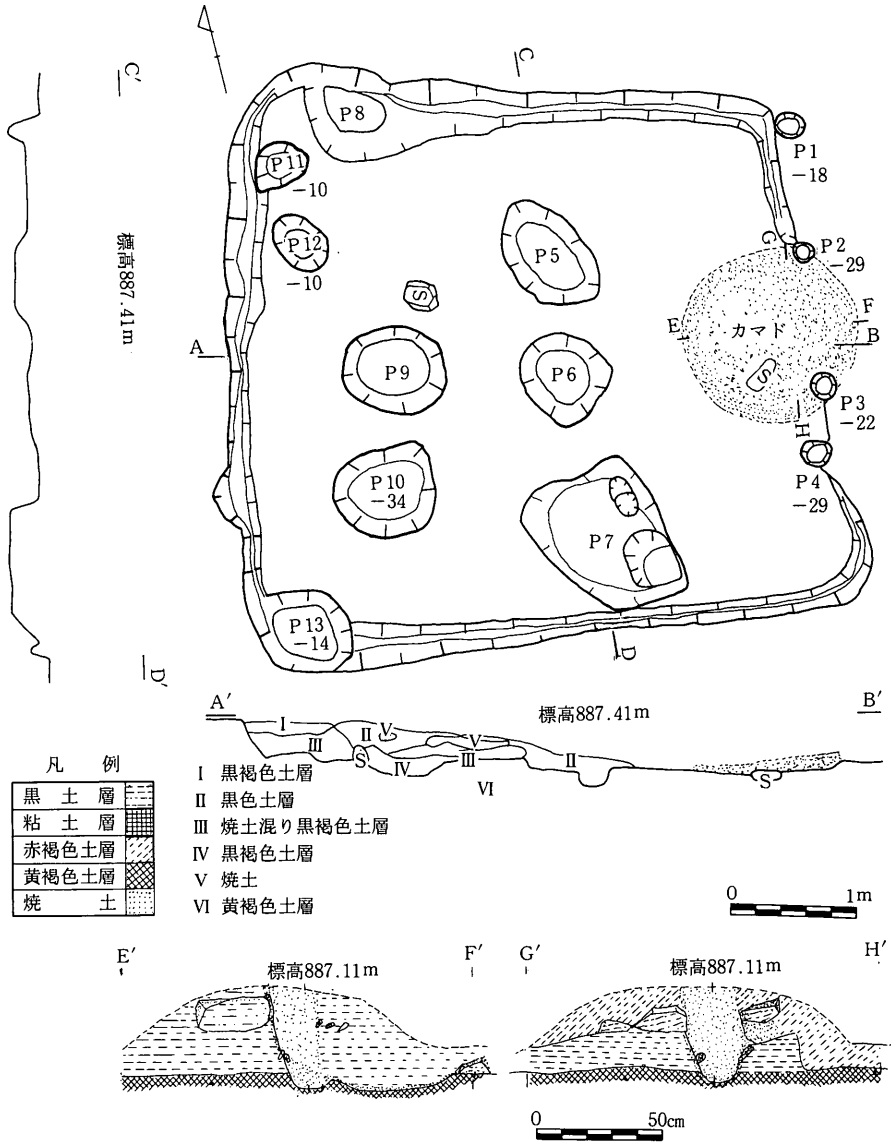
床面は部分的に凹凸が顕著であり、かたい叩きを呈し、細礫や人頭大程の礫が露出していた。幅が5cmから10cm位、深さ10cm内外の周溝が全周していた。大小様々なピットが13ヵ所検出されたが、主柱穴になりそうなのはP8、P10、P5、P6などであろう。東壁沿いに南北に配列されているP1、P2、P3、P4は母屋柱的な柱穴と想定されている。カマドは東壁中央部付近に構築され、南北1m40cm、東西1m40cm位の石組粘土カマドを成していた。石芯部分はほんのわずかで、大部分が粘土から組成されていた。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、よって平安時代後期の住居址と思われる。

遺物　（第7図）

第7図の1は土師器杯で、口縁径11.7cm、高さ6.2cmを測る。腰部はややつぼまり、口縁はやや彎曲しながら立ち上げる形である。外面は赤褐色を、内面は内黒をそれぞれ呈し、底部は糸

切り底である。内・外面ともにロクロ痕が顕著である。

2は土師器小型甕の底部で、底部径8.1cm、器厚9㎜～1cmを示し、底部がやや屈曲している。赤褐色を呈し、焼成は極めて良好で、固く焼きしめられている。胎土中に多量の長石を含み、それが器面の各所にキラキラと輝いていた。



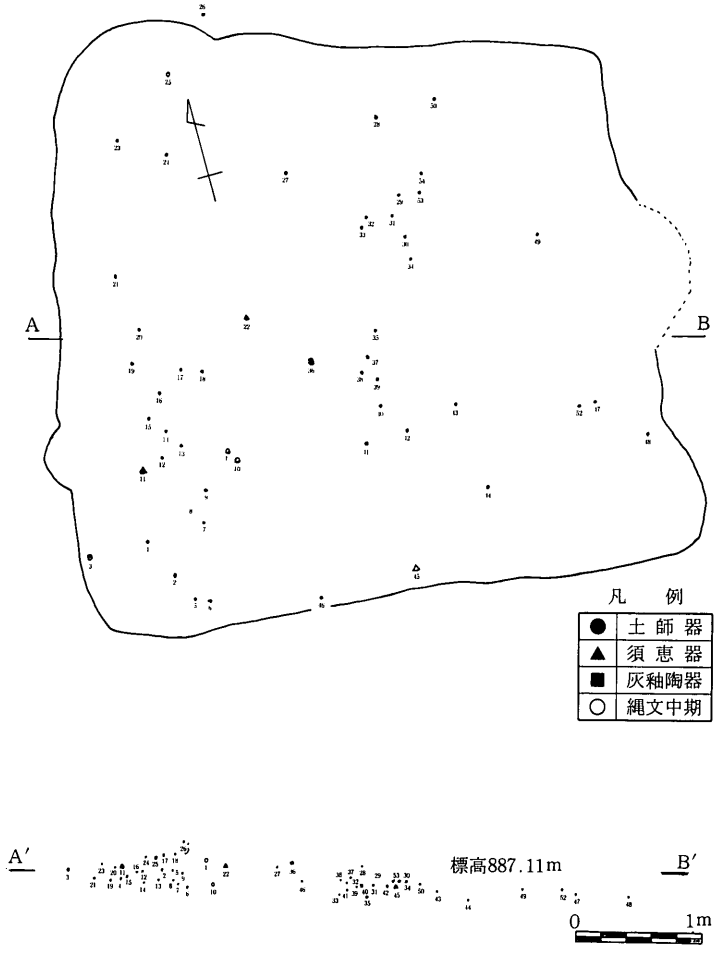
第5図　第1号住居址実測図（上）　第1号住居址カマド断面図（下）

3は土師器甕型土器の底部である。外面にカキ目が走向し、時期決定に大いに役立つ。底部径11.1cmを測り、底面近くでややくの字状に折れている。赤褐色を呈し、焼成は極めて良好で、多量の金雲母を含んでいる。

4は須恵器杯で、底径5.3cmを計り、回転糸切り痕が目にも鮮やかに見える。器厚は5㎜から7㎜と中厚手に属し、この種類として極、一般的である。灰褐色を呈し、細かな長石粒を含み、よくいわれている生焼き状態なものである。

5は土師器高台付杯の高台部分の破片である。高台付杯といえば、現在、土師器の編年研究からして、11世紀代に入って出現すると定説化づけられている。従って、この破片1つで第1号住居址の時代決定が可能となる。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。外面はロクロ痕が明瞭に浮き出ていた。底下部は外に若干張り出す。

6は須恵器長頸壺の口縁部付近で、口唇部の中央部が若干凹み状を呈する。内外面ともにロクロ痕が明瞭で、製作工程がよく理解できる。還元炎で焼かれたとみえて、濃い赤茶褐色を呈し、ところどころに自然釉があばた状に浮き出ていた。



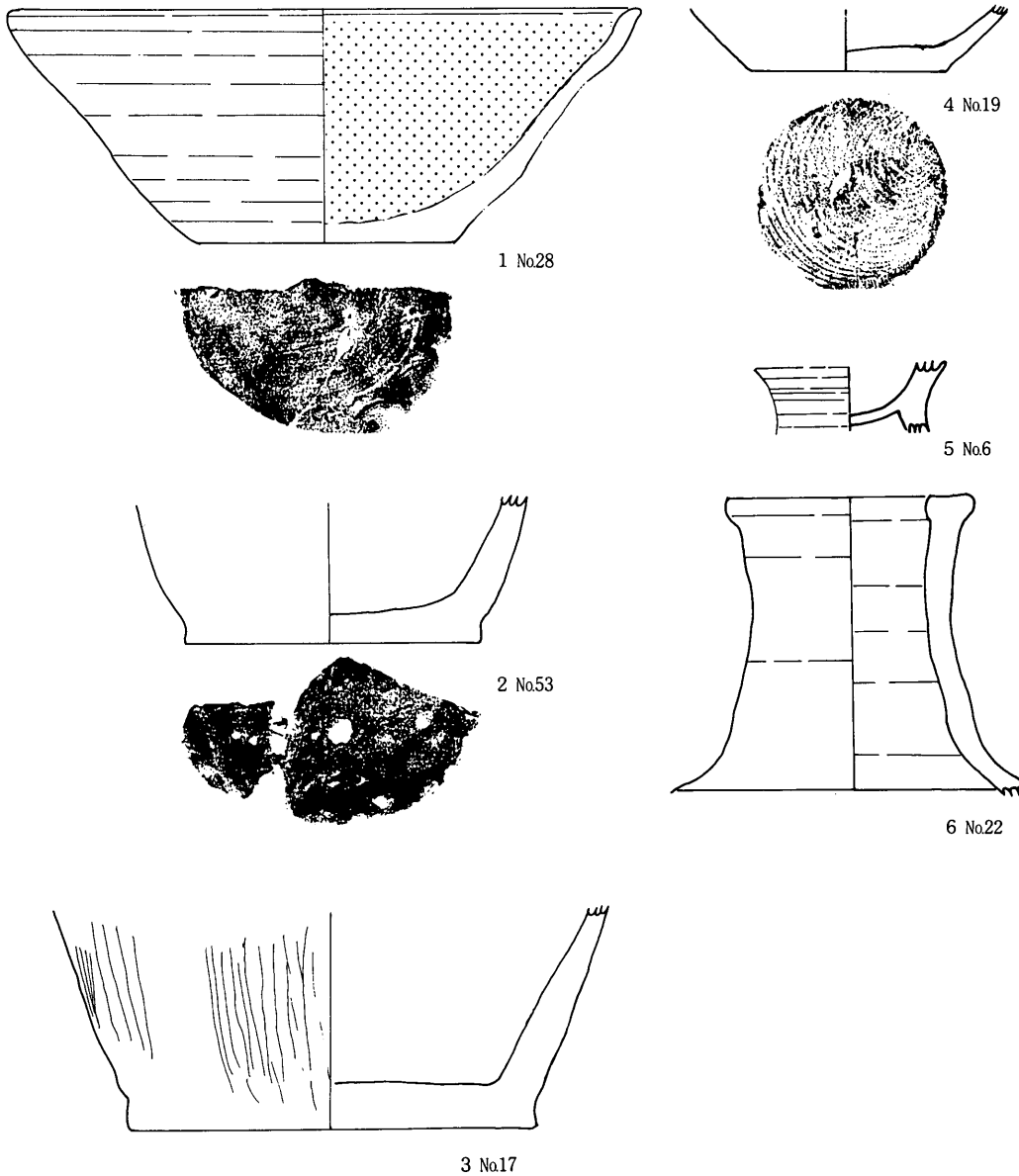
第6図　第1号住居址出土遺物分布図

第1号住居址からは第6図中に標示したような状態で土師器、須恵器、灰釉陶器、縄文中期土器が出土した。

そのうちで、主体は土師器であり、須恵器は数片、灰釉陶器は1点のみであった。縄文中期土器片は後からの飛び込みであろう。

遺物の出土状態は住居址の中央部から北西付近に比較的な集中を、カマド付近は極めて少ない点が特長の一つである。本来ならば、カマド周辺に多量の遺物が出土するのが、あたりまえであるのに、この事象に反するのは何んであろうか。

今後の研究課題として同一住居址内出土の土師器、須恵器、灰釉陶器を一体的な遺物として把握することにこころがける必要性が浮上してきている段階である。



第７図　第１号住居址出土遺物実測図（１：２）

第３号住居址　（第８～９図　図版３）

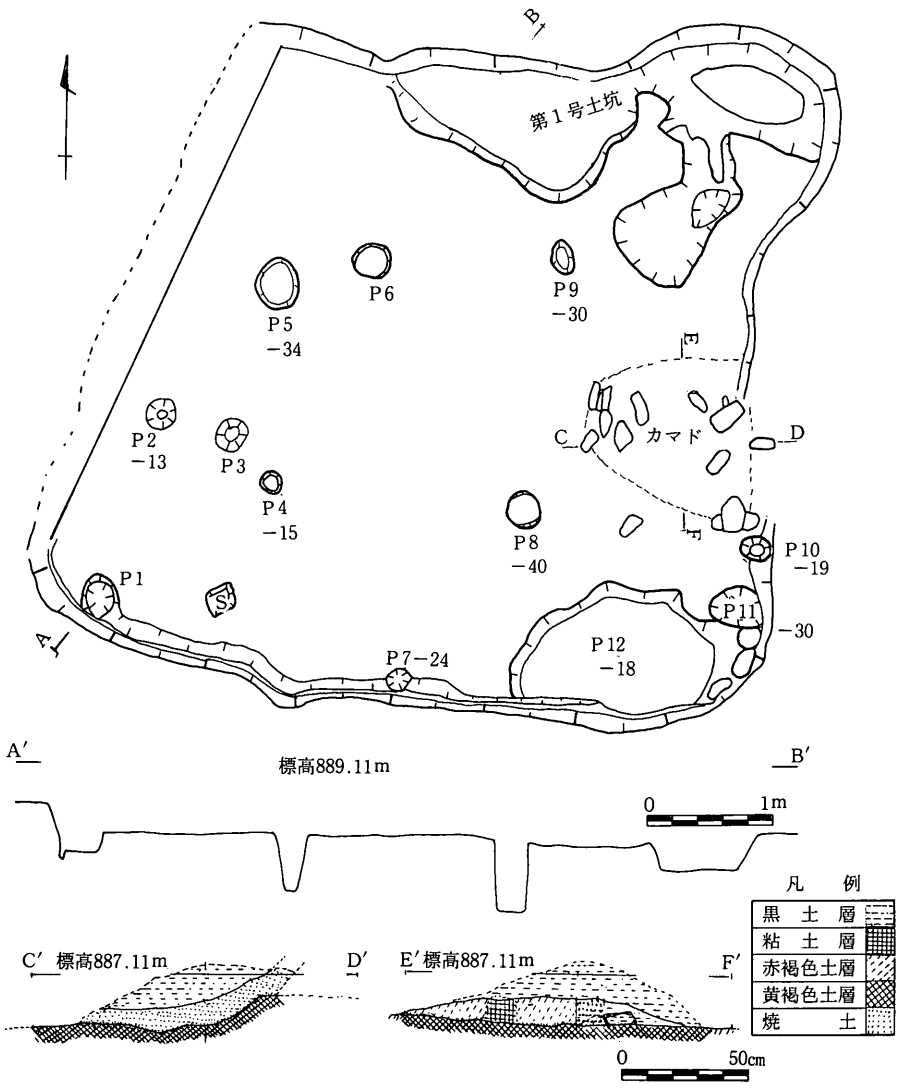
本址は東側で第２号住居址と近接した位置に発見され、表土面から80cm位下った砂礫混じりの黄褐色土層面を掘り込んで構築し、プランはところどころで凹凸はあるが、全般的に見て隅丸方形状の竪穴住居址である。規模は南北５ｍ10cm位、東西は西側が水道管付設工事のため、破壊されて現存していないが、推定するに５ｍ前後をそれぞれ測れると思われる。壁高は西、北で40cm程度、南、東で20cm程度をそれぞれ測定でき、大般において垂直に近く、その壁面に多量の細礫が露出していた。

床面は大般に平坦で、かたく叩かれていた。その状態は壁面と同じように多量の細礫が確認

でき、床面としてはあまり適切とは思えなかった。南壁直下に狭く、浅い周溝が掘られていた。

主柱穴は住居址の中央部付近に検出されたP4、P5、P6、P8、P9等々であり、配列が方形状に近い形を成していた。

カマドは東壁のほぼ中程に構築された石組



第８図　第３号住居址実測図・第１号土坑実測図(上)・第３号住居址カマド断面図(下)

粘土カマドであり、粘土の貼り付けは良好であったと見えて、その残存状態もよかった。出土遺物、特に灰釉陶器からみて、本址は平安時代後期頃と推定されえよう。遺物出土量は相当数にのぼったが、主となるものは土師器であった。特殊な遺物として鉄製の刀子が１点出土している。

遺物　(第10～11図)

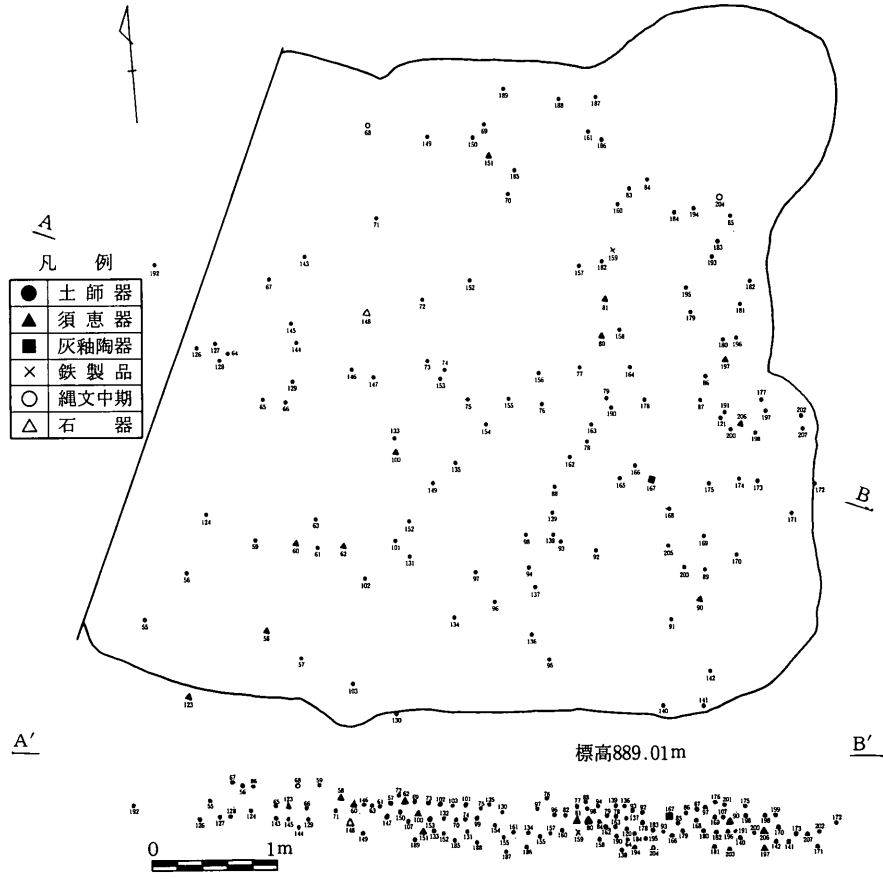
第10図の１は土師器杯で、口径14.2cm、高さ4.0cmを測る。胴部は直線的で、口縁部はやや外反する。内黒で、両面にロクロ痕が残る。糸切り底の様相を呈し、焼成は良好である。

２は内黒の土師器杯で、口径13.1cm、高さ4.1cmを測り、胴下部はやや膨まり、口縁部はやや外反気味を呈す。両面にロクロ痕が残り、焼成は良好である。(３、４、５)は胴下部がやや内彎する土師器埦。３つとも内黒で、両面にロクロ痕を顕著に認める。４は糸切り様式を導入し

ている。

6は土師器小型壺の口縁部で、口縁径6.7cmを測る。極めて薄く、器厚は4mm程度である。口縁はやや外反し、口唇部は丸味を呈している。焼成は良好。

7は須恵器広口壺の口縁部で、口径11.4cmを測る。口唇部は丸味を呈し、大きく外反し、胴部は強く張り出す。両面にロクロ痕が丁寧に施され、堅くしまった焼きである。還元炎による赤褐色を呈し、ところどころに自然釉が流れ出し、ピカピカと光沢を放ち、光まばゆかった。



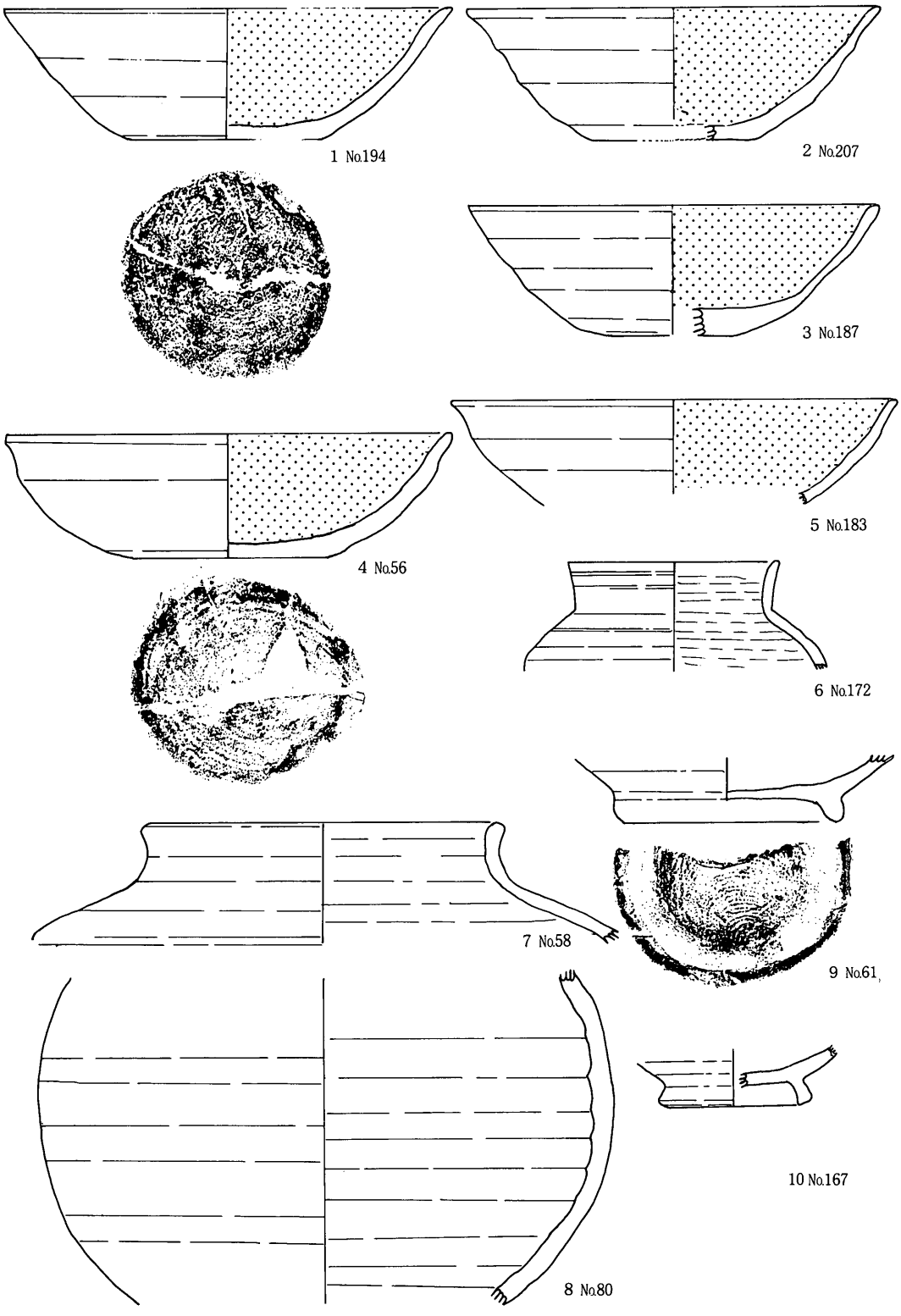
第9図　第3号住居址・第1号土坑出土遺物分布図

8は須恵器小型壺で、最大胴径18.1cmを測る。内・外面ともにロクロ痕が顕著で、強い還元炎によったとみえて、全面的に赤褐色を呈している。

9は土師器杯の底部である。底部は付高台で、その先端部はやや丸味状を呈し、やや外に張り出す、いわば三日月形高台の一種であろう。糸切り底を採用している。

10は灰釉陶器高台付杯であり、やや内反し、三日月形の低い高台で、底部以外の内面は施釉されているが、外面は大部分が欠損しているので、施釉方法及びその状態は全く不明となっている。黒味の強い胎土であり、従って産地は猿投方面と考えられる。

第11図は鉄製の刀子破片であり、錆びの進行度合は急激的で、大部欠損している。(飯塚政美)

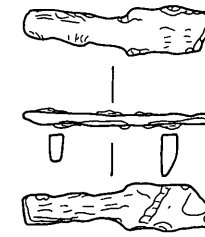


第10図　第３号住居址出土遺物実測図（１：２）

第１号土坑　（第８～９図　図版３）

本土坑は第３号住居址の北東隅に検出され、平面プランは不整形で、タライ状を呈している。壁高は10cm内外と浅く、凹凸が多い。床面も凹凸が多く、軟弱気味であった。

遺物は平安時代の土師器が出土しており、よって、この時期の土坑と想定される。



No.159

第11図　第３号住居址出土遺物実測図（１：２）

第Ⅲ章　所　　見

今回の調査結果については、以上述べてきた通りである。検出された遺構は、縄文時代中期中葉の竪穴住居址１軒、平安時代後期の竪穴住居址２軒を調査した。金鋳場遺跡の位置、歴史的環境、周辺地域の遺跡分布等については、本報告書の「まえがき」で触れてあるので、そちらを参照して下さい。

縄文時代の遺構・遺物について集約的に述べてみる。**第２号住居址**は南北４ｍ95cm位、東西５ｍ65cm位の規模を持つ竪穴住居址で、楕円形状の平面プランを呈している。南北60cm位、東西65cm位の規模を成すやや小型の方形石囲炉であり、炉の変遷形態の一時期を確立させてくれた。この住居址から出土した遺物は土器が全てであった。土器の編年から見て、本址は縄文中期中葉と想定でき得よう。これらを文様的に見てみよう。鋭角状のヘラによる細い沈線文が発達しているもの、斜縄文地を幅広ろによる沈線での磨消縄文の構成されているもの、やや乱れた斜縄文地に結節Ｓ字状文が垂下しているもの、規則的な連続爪形文が押捺されているもの、波状沈線文と、通称キャタピラ文が組み合わさったもの、連続爪形文が「く」の字状と、「Ｃ」字状に大別できるもの、太目の斜縄文地が施されているもの、縦位状の区画文の発達が顕著なもの等々様々であった。これらに基づいて編年的に追求してみると、「踊場式」、「梨久保式」、「九兵衛尾根式」、「新道式」、「藤内式」に分類できよう。

次に、今回の調査で検出された平安時代の遺構と遺物について集約的に述べてみる。

第１号住居址は南北４ｍ35cm位、東西４ｍ75cm位の数値を成す竪穴住居址で、隅丸方形状の平面プラン、石組粘土カマドで、その規模はやや小型化を成す。

本址は出土遺物からみて、平安時代後期頃と想定される。本址から土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。土師器はカキ目痕、高台付等の存在からみて、11世紀代の所産であり、つまり、国分期の新式に含まれると思われる。生焼きの須恵器が見られ、これは地元の窯産の可能性が濃厚と思われ、おそらく下伊那産であろう。

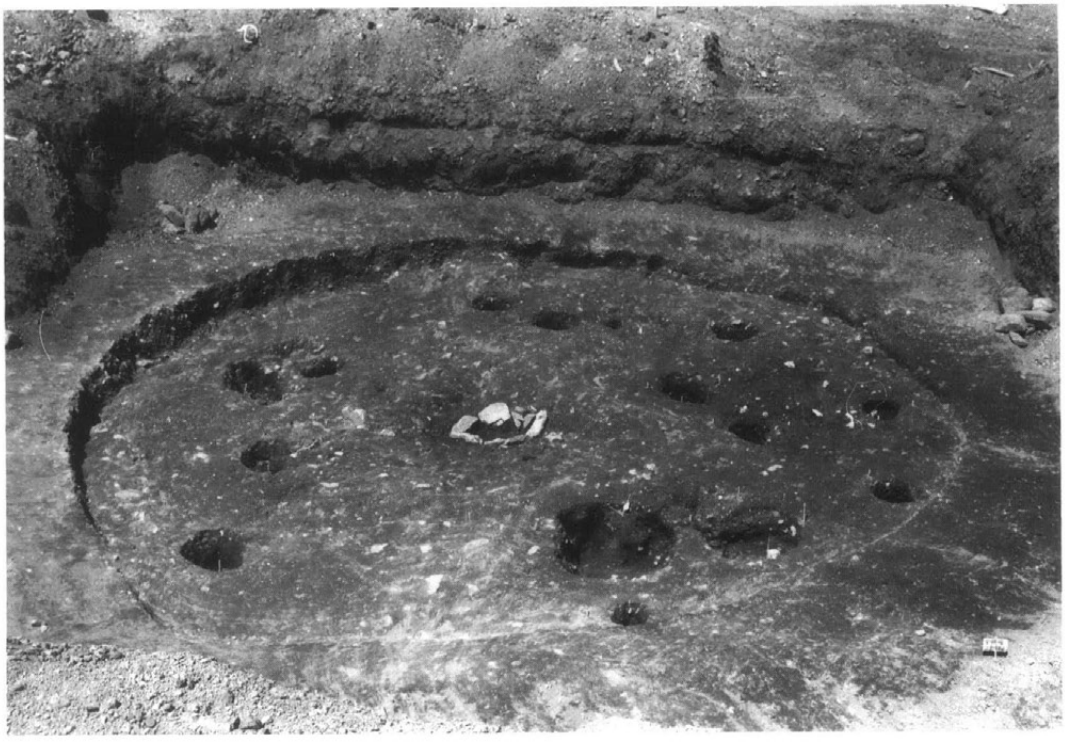
第３号住居址は一辺が５ｍ前後で、隅丸方形状の平面プランを呈する竪穴住居址で、石組粘土カマド、やや小型化を成す。本址の時期は第１号住居址とほぼ同じ、平安時代後期頃と想定できる。本址出土の土師器は比較的に内黒が多く、さらにロクロ痕、糸切り痕が顕著である点、

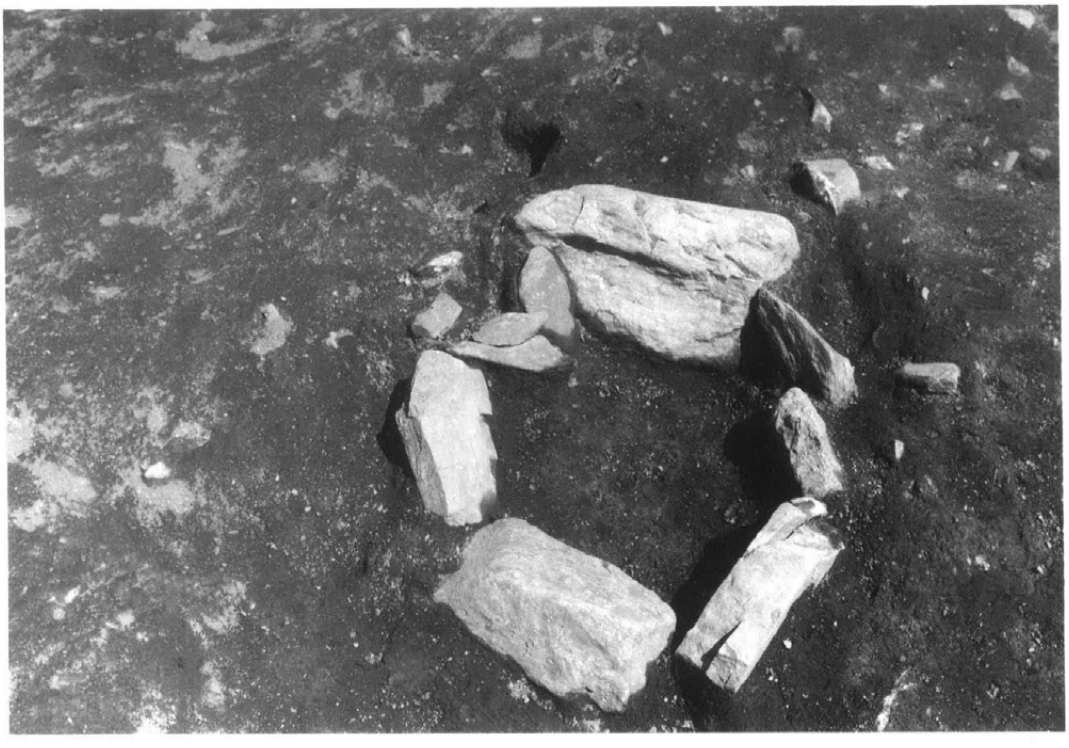
高台付土師器の存在からみて、国分期の新しい方に該当すると思われる。須恵器は還元炎の作りが多く、産地の究明が急がれよう。灰釉陶器は胎土からみて、猿投窯一帯の産で、さらに、高台の様相から黒笹90号窯期～折戸53号窯の時期と思われる。

本調査報告を終るにあたり、関係諸機関、関係各位に対し、深い敬意を表する次第であります。

（飯塚政美）

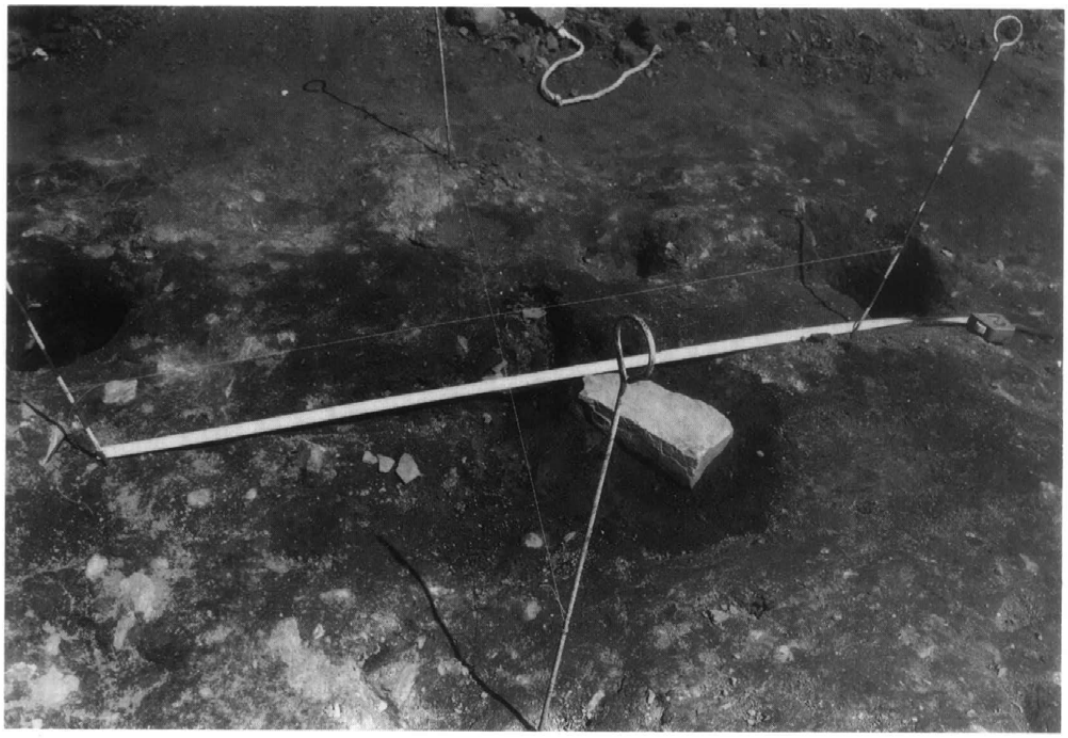
図　　版





第２号住居址（上）
第２号住居址炉（下）

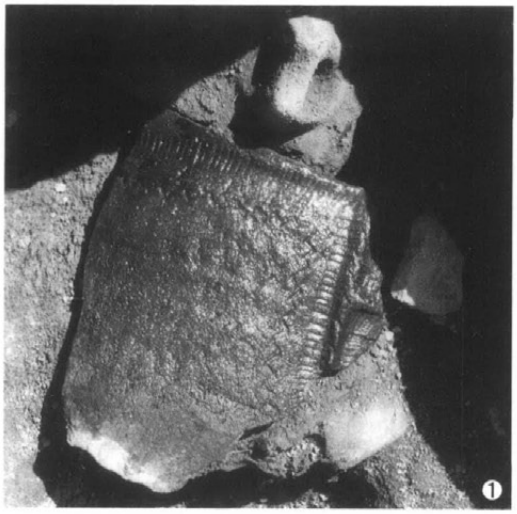
図版2　遺構

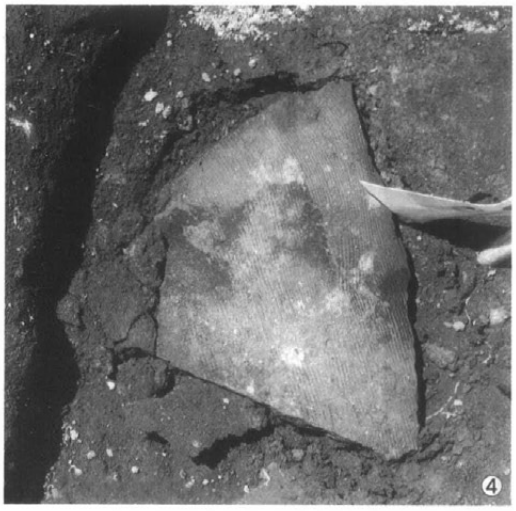


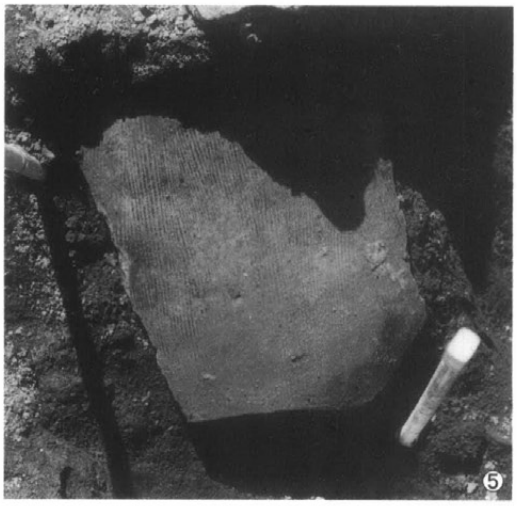
第１号住居址（上）
第１号住居址カマド（下）

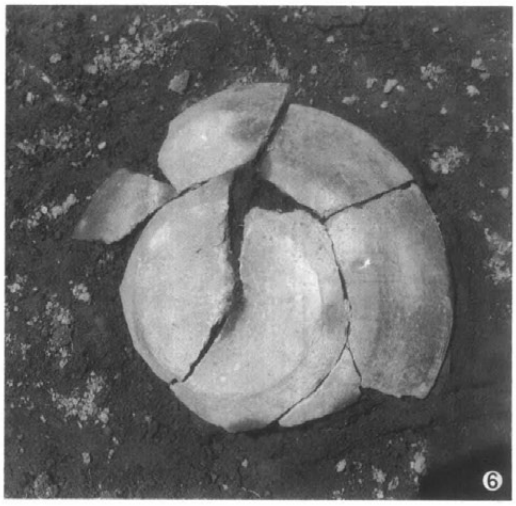
第３号住居址　第１号土坑（上）
第３号住居址カマド（下）

図版4　遺物出土状況









①土器出土状況　②～⑥土師器出土状況

報告書抄録

ふりがな	かないばいせき
書名	金鋳場遺跡（第Ⅲ次調査）
副書名	地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦1998年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かないば 金鋳場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわはびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成9年 4月15日～ 平成9年 5月2日	300	苺団地 土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金鋳場	集落址	縄文時代 平安時代	縄文中期竪穴住居址　1軒 平安時代竪穴住居址　2軒 平安時代土坑1基	・縄文時代中期の土器 ・平安時代の土師器 ・平安時代の須恵器 ・平安時代の灰釉陶器 ・平安時代の鉄器	集落址の実態がある程度解明できた。

金鋳場遺跡（第Ⅳ次調査）

目　次

目　　次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……5

第1節　発掘調査に至るまでの経緯……5

第2節　調査の組織……5

第3節　発掘調査日誌……6

第Ⅱ章　調　　査……7

第1節　調査の概要……9

第2節　遺構と遺物……9

（1）縄文時代の遺物……9

（2）平安時代の遺物……9

第Ⅲ章　所　　見……10

挿　図　目　次

第1図　地形及びトレンチ配置図……7

第2図　第1号トレンチ地層断面図……7

第3図　土器拓影……9

図　版　目　次

図版1　発掘調査状況

図版2　発掘調査状況及び遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった金鋳場遺跡は地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成事業）に伴う緊急発掘調査であり、第Ⅰ次、第Ⅱ次、第Ⅲ次調査とは若干離れた場所であった。各種の保護協議、事務手続が行われ、その経緯について順序をおって記す。

平成８年９月26日に長野県教育委員会と伊那市社会教育課、同農政課とで保護協議をする。

平成９年４月１日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成９年６月16日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の２第１項の規定による）を提出する。

平成９年７月24日付けで、金鋳場遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成９年７月24日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成９年７月24日付けで、金鋳場遺跡発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

第２節　調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁	
委員長代理	小坂栄一	
委員	岸　敏子	
〃	小松光男	
教育長	保科恭治	
教育次長	柘植　晃	
事務局	新井良二	（社会教育課長）
〃	鳥原千恵子	（副参事　女性室長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育係長）
〃	矢澤謙一	（社会教育青少年係長）
〃	飯塚政美	（社会教育係）

事　務　局　有　賀　　恵（社会教育課）

発掘調査団

団　　長　友　野　良　一（日本考古学協会会員）

調　査　員　飯　塚　政　美（　　〃　　）

〃　　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）

作　業　員　城倉三成　那須野進　織井和美　有賀秀子　松下末春

小田切守正　倉沢敏一（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成９年７月３日　発掘器材、測量器材を発掘現場へ運搬する。現場の草刈りを行い、整地した上にコンテナハウス１棟とスペースハウス１棟をそれぞれ建てる。

平成９年７月４日　金鋳場遺跡の最南端部に東西にトレンチを設定し、その命名は南から北にかけて第１号トレンチから第11号トレンチとする。第１号トレンチから第２号トレンチを掘り進めるが、遺構、遺物の検出は全く無かった。

平成９年７月７日　トレンチ掘りを北側の第３号トレンチと決めて、東西に掘り進めるが、その結果は前日と同様であった。

平成９年７月９日　トレンチ掘りを北側へ続行するが、その成果は全くあがらず。午後になって、風雨が強くなってきたため、発掘作業は午前中にて終了する。

平成９年７月14日　久しぶりに晴れた一日であった。トレンチ掘りを北へ、北へと掘り進めるが、遺物の出土はわずかに平安時代の土師器片１つであった。当然ではあるが、遺構の検出はありえない。

平成９年７月15日　前日と同様な作業を続行するが、遺構、遺物の検出は全くなかった。

平成９年７月16日　前日と同様な作業を進めていくが、何も発掘成果は収められなかった。

平成９年７月18日　トレンチ掘りを北へ、北へと進展させていくけれども遺構、遺物の検出は何もなかった。

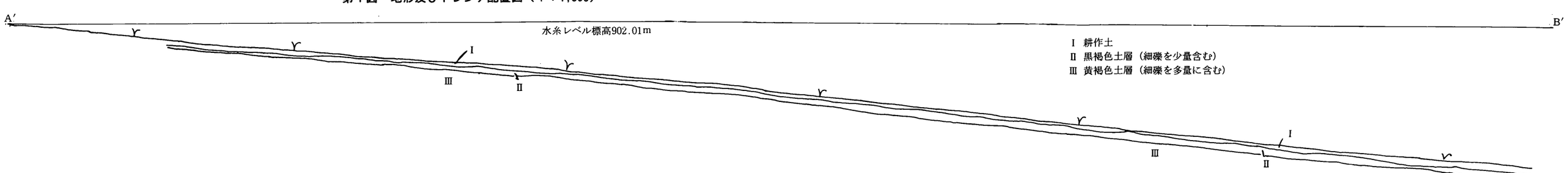
平成９年７月22日　第10号トレンチ、第11号トレンチを掘り進めていくが、わずかに前者のトレンチより黒耀石の破片が１点出土したのみで、遺構の検出はみられなかった。本日をもって、北側地区の発掘調査を完了した。全測図、地層断面図の作成。

平成９年７月23日　本日をもって発掘作業の全てを終え、発掘器材並びに測量器材を整理して、次の発掘調査現場へ運搬する。

平成10年１月～平成10年２月　遺物の整理、図版の作成、原稿執筆、報告書を印刷所へ送る。

平成10年３月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）

第１図　地形及びトレンチ配置図（１：1,000）



第２図　第１号トレンチ地層断面図（１：200）

第１節　調査の概要

今回の調査地区は、第Ｉ次調査地区から道を隔てた所であり、以前は放牧地として利用されていたが、ここ数年間は人手が入らず、荒れ放題であった。その結果、現状は牧草を押しのけて茅が背丈程に繁茂していた。従って、これを、如何に処理するかが課題であり、重機を全面的に投入して、調査に取りかかった。

掘り進めてみると、耕作土は荒れていたが、その下の地層は割合に安定していた。ところどころに果樹園に利用したとみえる追肥用の深耕の跡が円形状に明瞭に判別できた。調査の結果平安時代の土師器片１片、縄文時代中期の黒耀石片１ケが出土したに過ぎなかった。当然のことと思われるが、遺構の検出は何も無かった。

第２節　遺構と遺物

（１）縄文時代の遺物

前節で述べたように単なる黒耀石片であり、剝離面及び調整痕は全く見当たらなかった。全般的に見て縄文中期のものと思われる。

（２）平安時代の遺物

第３図に掲載したのは平安時代の土師器片である。拓影では不明瞭であるが、外面にわずかにカキ目痕が、内面には丁寧なヘラけずり痕を認める。赤褐色を呈し、焼成は極めて良好である。平安時代の国分期の新しい方に属すると思われる。　（飯塚政美）

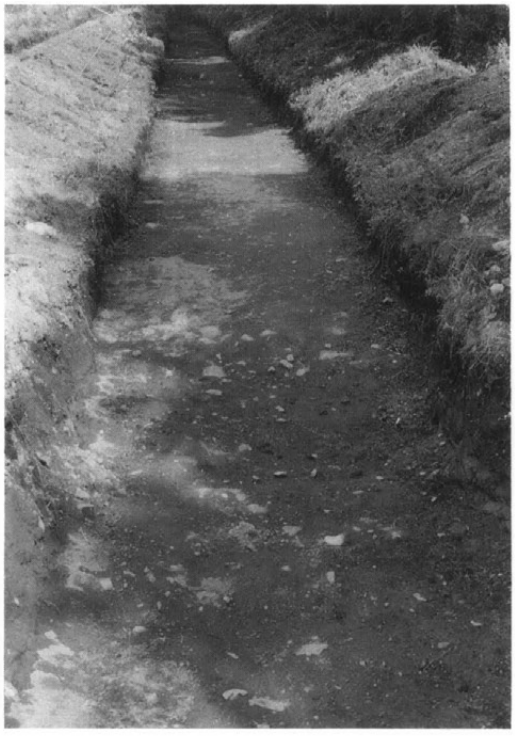
第３図　土器拓影
（１：２）

第Ⅲ章　所　　見

今回の調査面積は凡そ8000㎡と広範囲であったが、その調査結果は先に述べたように、遺構に関しては全くなく、わずかに縄文中期の黒耀石片と平安時代の土師器片だけにとどまった。従って、所見に関しては記述の内容が乏しくなって当然である。以上の面からして、遺跡範囲の広い金鋳場遺跡の内で、空間部分の一帯と想定される。　　（飯塚政美）

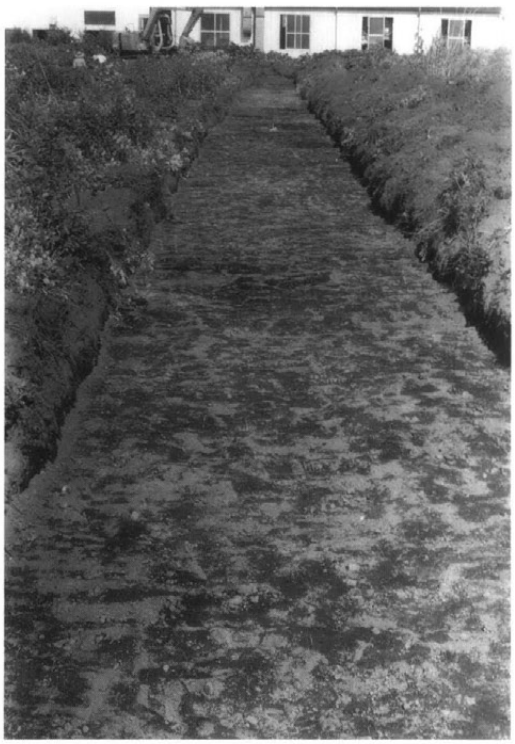
図　　版

図版1　発掘調査状況



第1号トレンチ（左上）　第2号トレンチ（右上）
第3号トレンチ（左下）　第8号トレンチ（右下）

図版2　発掘調査状況及び遺物出土状況



第９号トレンチ（左上）　第10号トレンチ（右上）
土器出土状況（左下）　黒耀石出土状況（右下）

報告書抄録

ふりがな	かないばいせき
書名	金鋳場遺跡（第Ⅳ次調査）
副書名	地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦1998年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かないば 金鋳場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわはびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成9年 7月3日～ 平成9年 7月23日	8,000	苺団地 土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金鋳場		縄文時代 平安時代	なし	・縄文時代中期の土器 ・縄文時代中期の黒耀石	遺物の出土状態からして、この遺跡の範囲が掌握できた。

金鋳場遺跡（第Ⅰ次～第Ⅳ次調査）
―― 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

平成10年3月12日　印　刷
平成10年3月13日　発　行

発行所　伊那市教育委員会
　　伊那市総務部企画課
　　伊那市経済部農政課

印　　刷　㈱小松総合印刷所